

Title	ビルマ古典歌謡におけるジャンル概念 : ウー・サ歌謡集の19-20 世紀における貝葉写本の分析を通して
Author(s)	井上, さゆり
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 3 P.73-P.108
Issue Date	2010-03-11
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/5885">http://hdl.handle.net/11094/5885</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ビルマ古典歌謡におけるジャンル概念  
—ウー・サ歌謡集の19-20世紀における貝葉写本の分析を通して—

井上 さゆり

INOUE Sayuri

Abstract :

The Concept of Genre in Burmese Classical Songs with  
Special Reference to Manuscripts of U Sa's Anthology  
Written in Nineteenth and Twentieth Centuries

In this article, I examine how Myawadi Mingyi U Sa (1766–1853) recognized the concept of genre in his works. For this purpose, I conduct a comparative analysis of three copies of U Sa's anthology (year of origin: 1849) with the manuscript of "Song Titles" (year of origin: 1870).

It is evident from conventional literature on Burmese classical songs that song genres can be clearly distinguished from other genres and that almost any song can be classified under a certain genre. However, by analyzing all the song anthologies in palm-leaf and paper manuscripts that were available, I found that songs were not slotted into any particular genre at the time of their conception. I also found some collimating marks that were used when composing or performing songs. A particular set of marks is said to define a certain genre; however, when the songs are performed, the marks and the genre of some songs sometimes change. Therefore, in my opinion, the relationship between individual songs and their genres is not exclusive. Furthermore, the boundaries between genres cannot be clearly defined.

U Sa, a remarkable lyricist and composer, mentioned the genres of only some of his compositions in the manuscripts of his anthology. He composed the maximum number of *patpyo* songs but only a few *alaik* or parody songs in his anthology, and other authors used his songs as the base for their *alaik* songs. U Sa composed the original songs according to the *patpyo* genre. By analyzing three manuscripts of U Sa's anthology, I found that he was able to classify songs that had been composed before him into genres. However, he did not classify the songs that were composed in his time into genres like *patpyo*, *yodaya*, and *mom*. I therefore conclude that U Sa did not employ any genre concept to classify his songs, such as *patpyo*, but called them *thanzan* or new type songs.

**Keywords** : Burma, classical songs, thachingyi (maha gita), genre, U Sa

キーワード：ビルマ，古典歌謡，大歌謡，ジャンル，ウー・サ

## はじめに

本稿の目的は、ビルマ古典歌謡の代表的な創作者であるミャワディ卿ウー・サ (Myawadi Mingyi U Sa 1766-1853, 以下ウー・サ) の歌謡ジャンルに関する概念を検討することである。これは、「大歌謡 (thachingyi<sup>1</sup>)」と総称されるビルマ古典歌謡における下位ジャンルが形成された過程を明らかにするための作業の一つである。

本稿で述べる「歌謡ジャンル」とは、ビルマ語では「歌謡の種類 (thachin myo)」[Ministry of Culture 2001 : 74 の「パッピョー (patpyo)」の項目より]、「歌謡の分類 (thachin ganda)」[Hla Shwe 1994 : 9] などと呼ばれるものである。英語では「歌謡の型 (song type)」[Garfias, et al. 1980 : 478]、「歌謡のクラス (classes of songs)」[Williamson 2000 : 42] などと呼ばれ、日本語では本稿と同様に「ジャンル」[山口・徳丸 1992 : 26] と呼ばれる。

大歌謡とは、現在のビルマにおいて、「伝統歌謡」「古典歌謡」<sup>2</sup>として位置付けられている歌謡作品群の総称である。筆者が確認した限りでは現存する作品数は1000篇を超える。中には歌詞が歌謡集において伝えられるのみで、旋律が確認できない作品もある<sup>3</sup>。大歌謡の枠組みは、19世紀後半から20世紀にかけて貝葉や刊本の形で歌謡集が何度も編纂される過程で形成された [井上 2007]。大歌謡に含まれる作品は、1954年に出版されて以降、代表的な歌謡集として使用される『国家版大歌謡』[Ministry of Culture 1969 (1954)] では14の下位ジャンルに、歌謡集として掲載作品数が最も多い貝葉写本である『著名歌謡作品全集』[NL 3149] (1919) では24の下位ジャンルに分けられている。歌謡集刊本はこれまで15種類出版されている [井上 2007 : 153-154]。ほとんどの歌謡集に共通して掲載されているジャンルは、弦歌 (kyo), 編み歌 (bwe), 承前歌 (thachingan), パッピョー (patpyo), アユタヤ歌謡 (yodaya), モン歌謡 (mon) と呼ばれる6つである。

この6つのジャンルを含め、多くのジャンルの定義に用いられる主な指標は、1) 調律種<sup>4</sup>, 2) 拍子, 3) 特定のジャンルに属する作品に頻繁に使用される旋律, 4) ジャンルごとに定まった前奏, 5) ジャンルごとに定まった後奏・歌唱部の5つである [井上

1 本稿でのビルマ語転写は人名表記の方式に拠ったため、綴り字は反映していない。「タチンジー (thachingyi)」は書名などではパーリ語借用語を用いて「マハーギータ (maha gita)」とも呼ばれるが、口語では一般的に「タチンジー」が用いられる。

2 「ミャンマー人が伝統的に歌ってきた弦歌、編み歌などの歌謡。classical song」などと定義される [Ministry of Culture 2001 : 115]。

3 現在、最もレパートリーの多い音楽家であるウー・イーヌエ氏が400篇ほど演奏ができるといわれているが、実際に演奏されるのは、『国家版大歌謡』[Ministry of Culture 1969 (1954)] に掲載された169篇のうちのさらに一部に集中している。

4 ビルマ音階は7音階であり、その7音の主音及び各音程の配置に4種類の方法がある。本稿では、この4種類を堅琴上で調弦した場合の音のセットを調律種と呼んでいる。英語では「モード mode」と呼ばれる場合もある [Becker 1969 : 269]。調律種については [井上 2008b] を参照。

2008b]。ジャンルによっては、歌詞内容や歌詞の詩形式によって定義されているものもあるが、作品数は僅かである。また、それぞれのジャンル名の由来は不明なものも多く、歌詞内容がジャンルによって特に異なるわけではないことから、ジャンル名と歌詞内容は関係がないと考えられる。特定のジャンルに属する作品は旋律を共有して類似したものが多くもあり [井上 2008a]、大歌謡の演奏<sup>5</sup>に馴染みのある者にとっては、旋律を聞くことで作品のジャンルを判断することが比較的容易である。

加えて、キンゾウ (Kyin Zaw) が 1940 年の論文 [Khin Zaw 1940] で調律種 (key) と各ジャンルの関係を示して以降、主に外国人のビルマ音楽研究者 [Becker 1968, 1969; Garfias 1975; Williamson 2000] は、各ジャンルを区別する指標を明らかにすることに重点を置いてきた。このような背景もあり、大歌謡におけるジャンル区分そのものはこれまで疑問視されてこなかった。しかし、筆者がこれまでの考察で明らかにしたように、従来のビルマ音楽研究ではほとんど使用されてこなかった一次資料である貝葉写本を検討していくと、歌謡作品が作られた時点では全ての作品にジャンル名が付されていたわけではなかった [井上 2007]。全ての歌謡作品をいずれかのジャンルに分類した事実が初めて確認できるのは、1870 年に編集された貝葉『歌謡題名数の御記録』(以下、『題名数』) [NL barnard1076] においてである。これ以降に編纂された歌謡集において、全ての作品をジャンルごとに分類するようになる。

しかし、実際に個々の作品を見ていくと、どのジャンルにも、ジャンルの定義から逸脱する作品が含まれている [井上 2008b]。筆者は、二つのジャンルに解釈可能な作品、またはジャンルを定義する指標の一つである調律種を他の調律種と交換して演奏する作品例の分析を通して、現在のジャンル区分は作品が創作された後に恣意的に為されたものであることを論じてきた [井上 2008b]。そして、ジャンルとジャンルは排他的に区別されるわけではなく、また、個々の作品とそれが属するとされるジャンルとは常に固定しているわけではないことを明らかにした [井上 2008b]。

大歌謡の中で作品数が多く中心的な位置付けをされるジャンルが、弦歌とパッピョーである。『著名歌謡作品全集』[NL 3149] では全掲載作品 946 篇中、弦歌は 256 篇、次に多いパッピョーが 187 篇と、この二つのジャンルで大歌謡の半数近くを占めている。そして、ウー・サが、現存する大歌謡作品の作り手としては最も多くの作品を残している。特にパッピョーにおいて、ウー・サの作品は 74 篇と 40% 近くをも占めている。筆者は「アライッ」という創作技法の分析を通して、既存の作品が作りかえられる過程を明らかにした [井上 2008a]。「アライッ」とは「旋律」の意味で、例えば「タンタヤーテーシンのアライッ」と表題にある場合、その作品は「タンタヤーテーシン」で始まる作品の旋律を用いて歌詞のみを変えたことを示す。パッピョーにおいてはウー・サの作品が元歌とされて後世の作り手によって「アライッ」を作られていることから、大歌謡ジャンルとしてパッピョーが

5 大歌謡は竖琴や竹琴、サインワインと呼ばれる環状太鼓楽団などの様々な楽器と共に演奏される。楽器の種類によって演奏する作品を特に区別するわけではない。

分化する起点にウー・サを位置付けることができた [井上 2008a]。

しかし、1849年にウー・サが編集した彼の作品集の貝葉『ウー・サの文集と歌謡集』<sup>6</sup>（以下『ウー・サ』）の中には「パッピー」という言葉が記載されていないことを、ミンチイが指摘している [Myint Kyi 2001: 136]。そして、ミンチイは、ウー・サ亡き後に「パッピー」という言葉が広く利用されるようになったのではないかと述べている [Myint Kyi 2001: 137]。このことから、ジャンルの命名が後付けの行為であることが示唆されるが、ミンチイは現在の視点から、「パッピー」と呼ばれる作品群を固定したものと捉え、それが命名された時期についてのみ指摘しているといえよう。筆者が貝葉写本及び折り畳み写本を調査したところ<sup>7</sup>、「パッピー」という言葉が初めて確認できるのは、1870年の『題名数』 [NL barnard1076: ke(w)<sup>8</sup>] においてであった。実際には、ウー・サは後にパッピーとされていく自身の作品をどう捉えていたのだろうか。

一方で、ウー・サは弦歌の創作においては、すでに先達が残した作品の蓄積の後に登場していた。ウー・サは、弦歌においては「アライツ」の技法を用いて既存の作品の旋律を利用して創作していた [井上 2008a: 41-42]。このことから、弦歌など彼の創作活動以前に作られていたジャンルについては、それらジャンルに含まれる作品群を一つの「型」、もしくはジャンルとしてウー・サは意識していた可能性がある。

そこで本稿では、『ウー・サ』におけるジャンル概念を追い、ウー・サが意識しているジャンルと意識していないジャンルについて検討する。特に、ウー・サが多くの作品の創作を行っていた「パッピー」に帰属すると考えられている作品の、『ウー・サ』における位置付けに注目する。

以下、第1節では『題名数』におけるジャンル区分とそれぞれに分類されている作品のうち、『ウー・サ』にも掲載されている作品の数を明らかにする。第2節においては、『題名数』に記載された歌謡ジャンル区分と『ウー・サ』に記載された作品の歌謡ジャンルについて比較を行い、『ウー・サ』中にジャンル名の記載されているものについて検討する。第3節では同様にして、『ウー・サ』中にジャンル名の記載されていないものについて検討する。第4節では、『ウー・サ』におけるジャンル概念について検討する。なお、本稿ではジャンルに関する記載の箇所を焦点を当てるため、引用箇所についての註は最低限にとどめる。

6 ミンチイは「ミヤワディ卿ウー・サ自身が著した『音楽の大記録 (Gita hmattan gyi)』」と記しているが [Myint Kyi 2001: 136]、参考文献に掲載されている貝葉は本稿で使用している写本年不明の国立図書館蔵の写本 [NL kin351] であるので、貝葉写本の『ウー・サ』を指すと考えられる。

7 筆者が調査したのは、ミャンマー国立図書館、ヤンゴン大学中央図書館、ヤンゴン大学歴史研究センター図書館所蔵の写本である。貝葉中に記載されている緬暦には月日まで示されている場合は西暦で年月日を示し、年のみが示されている場合は便宜的に638年を足した西暦を併記した。実際に正確な対応西暦を出すには月日まで必要である。

8 貝葉の頁は、ビルマ文字によって示される。一枚の貝葉の両面をそれぞれ腹 (wun)、背 (kyaw) と呼び、背側から頁は書き始めるが、頁を示す文字は腹側の左端に記載される。本稿では、腹側と背側をそれぞれ (w)、(k) と示し、例えば「ka(k)」と示した場合は「ka」という文字が記載された頁の背側を示す。また、刊本においても本文が始まる前の部分の頁がビルマ文字によって示されることがある。



## 1. 『題名数』(1870)におけるジャンル区分とウー・サの作品

『ウー・サ』と本稿で呼んでいるウー・サの作品集には3点の写本があり、それぞれ題名が異なっているが、内容から同じ底本からの写本であると考えられる [井上 2007: 137-138]。1883年写本 [UHRC pe465], 1902年写本 [UCL pe42332], 写本年不明の写本 [NL kin351] の3点である。それぞれの写本の序文に、1849年7月24日にミンドン皇太子 (Mindon, 後に王。治世 1853-1878) の勅命によってウー・サが25歳から83歳までに書いた作品を記録したものであることが示されている [UHRC pe465: ka(w)-kaa(w)]。原本の所在は確認できなかった。本稿では主として、写本年の分かる中で最も古い1883年の写本 [UHRC pe465] を使用する。

『ウー・サ』の貝葉3点と刊本の違いの詳細は本稿では扱わないが、写本3点と刊本がそれぞれの筆写もとを共有するのかどうかについて確認しておく。刊本は、ダゴン・キンキンレーという人物所有の貝葉をもとに出版したもので、この人物が序文を寄せているが [Zwe Sape Press 1967: ka-ga], 貝葉の書誌情報については記載されていない。筆者が確認できた写本3点のうちのいずれかがこの刊本のもとになった貝葉であるとの確認も得られなかった。年代順に考えると、1902年写本の前が1883年写本になるが、筆写もとは共有しないと考えられた。その理由は、刊本の192-198頁に当たる大量の部分が1883年写本 [UHRC pe465] に欠けているが、1902年写本 [UCL pe42332] と、写本年不明の国立図書館蔵の写本 [NL kin351] には記載されているためである。このことから示唆されるのは、刊本と1902年写本、写本年不明の写本の筆写もとが同じ、または同じものから写した別のものであるということである。また、刊本のもととなった貝葉は1883年写本ではないといえる。

『ウー・サ』中では、作品は表題やその作品が書かれた状況の説明文の後に掲載される形をとっているが、全ての作品に表題や説明が書かれているわけではない。貝葉中では改行がなされずに作品が記載されるため、一つの作品の始まりと終わりの箇所を判断し、表題、もしくは句読点などに頼る。しかし、『ウー・サ』の中に掲載された作品は、表題が付いているものと、付いていないものがあった。また、句読点で区切られていないが、他の歌謡集では独立した作品として掲載されていることから、個別の作品として作品を分けることができると考えられる箇所もあった。そのため、『ウー・サ』の刊本 [Zwe Sape Press 1967] と、歌謡集として最も掲載作品数の多い貝葉『著名歌謡作品全集』 [NL 3149] を参考にしながら、貝葉の『ウー・サ』の中で個別の作品を特定し、それに基づいて分析を行う。本稿で参照する場合は、筆者が分けた箇所で付した通し番号を用い、貝葉の該当ページ数を併記することによって指示する。

『ウー・サ』中では次のような表題に続いて作品が記載されている場合が多く見られた。

ウンジー [大臣] であるミャワディ町領主ミンジー・マハーティハトゥラ [ウー・サ] がうら若い時、アマラブラ、第一の町 [城塞と王宮] を建てた、御威光が非常に貴くあられる、生まれたばかりの雌の六牙象をお手に入れになられた主君陛

下の貴い第一王子、御威光の非常に大きい皇太子殿下のおそばでいつも仕えており、緬暦1160年〔西暦1798年〕国王陛下はタウンゲー町へ御御足をお延ばしになられて、水の澄んだ場所の王宮でお暮らしになられていた。王都では皇太子殿下がお守りになられている時に、大史〔セイロン古代史〕の中でウィザヤコンマ王子がランカー島へ渡って鬼を退治した後、そのランカー島で国を建てるところから始まる、祭りでの劇をなされた〔時のために詠んだ〕、散文の歌謡である。〔その歌謡が〕伝統の通りに伝わってくると、代々の王達の治世、閻浮提王たちに伝えられ、ウィンガラツ王へ、リンガーディーパ王女をたくさんの取巻きと共に船で送った時、海へ船を放ったことを詠むようにという御下命で、〔内親王の〕御殿で財政書記の地位で仕えていた時の25歳に書いて贈った、舟が帆走する歌〔文中の括弧及び下線部は筆者。以下同様〕〔UHRC pe465 : kaa(w)〕。

上の表題は比較的長い例である。この表題に続いて「イーピンレー（海）」で歌詞が始まる作品が続く。これは、『著名歌謡作品全集』（1917）では「パッピョー」として掲載されている作品であるが〔NL 3149 : si(w)〕、『ウー・サ』では上記の引用文中に下線部で示したように「歌」とのみ記載されている。また、『題名数』においてもパッピョーの分類の中にこの作品は入れられていない。このように、『ウー・サ』における作品の記載とその他の歌謡集写本におけるジャンル分けは一致していない場合が多々見られた。そこで、本稿では、『ウー・サ』中に記載されている作品と、『題名数』中に記載されている作品で一致するものを探し、『ウー・サ』における記載と『題名数』におけるジャンル分けを比較する。

『題名数』には、作品の題名が書いてあるのみで、作者名と作品自体は記されていない。また、弦歌についてのみ、歌謡のタイトルと歌詞の出だしの両方が併記されているが、他のジャンルは、作品の出だしのみで参照されている。例えば弦歌については、「大きな盆、ティーダーティーダー」のように作品名（「大きな盆」）と作品の出だし（「ティーダーティーダー（ひんやりとした）」）が併記されているが〔NL barnard1076 : kii(w)〕、「パッピョー」の分類においては「コンバウンパラメー（最上のコンバウン）」のように作品の出だしのみが記されている〔NL barnard1076 : ke(w)〕。歌詞の出だし部分は、他の作品と同一である例は少なく、刊行されている歌謡集における目次も歌詞の出だしで作品を指示している。このように、歌謡の出だし部分は固有名称として扱われていることから、本稿では訳さずにカナで表記することにする。そこで、『題名数』に記された作品の題名、すなわち作品の出だしと、『ウー・サ』中の作品を比較して、一致する作品を割り出した。その数を示したものが、表1である。

各ジャンルについては、他の文献には登場せず、ジャンル名以外の情報が不明なものも多くあった。本稿ではジャンルの分類に重点を置くため、各ジャンルがどのようなものであるかの註は最小限にとどめる<sup>9</sup>。また、ジャンル名は同じものと思われるものでも用語に違いがある場合があり、原語を参照する必要がある場合には随時ルビで示した。

表1 『題名数』中のジャンル名と題名の数、及びウー・サの作品数

『題名数』			『ウー・サ』
巻数 <sup>10</sup>	見出し (ジャンル名)	題名の数	ウー・サの作品
2巻	大承前歌 <sup>タチンガン</sup> , 中承前歌, 小承前歌の題名	50	4
3巻	大編み歌 <sup>ボエ</sup> , 中編み歌, 小編み歌の題名	132 <sup>11</sup>	23 <sup>12</sup>
4巻	大弦歌 <sup>チヨー</sup> , 中弦歌, 小弦歌の題名	180 <sup>13</sup>	5
5巻	大パッピヨー, 中パッピヨー, 小パッピヨー, 戯曲中のパッピヨーの題名	103 <sup>14</sup>	32 <sup>15</sup>
6巻	戯曲中のパッピヨー, 変わり歌 <sup>チービヤウン</sup> ・緩慢歌 <sup>チートウエ</sup> , 緩慢歌 <sup>チートウエ</sup> , 重畳歌 <sup>チーダツ</sup> , 季節を詠んだ主音 <sup>タン</sup> 回帰 <sup>ダウツ</sup> 四行詩, 田舎の人々の生活の主音 <sup>タン</sup> 回帰 <sup>ダウツ</sup> 四行詩, 夫哀歌 <sup>ボーレー</sup> , 変わり夫哀歌 <sup>ボーレービヤウン</sup> , 一つの石の歌 <sup>チャウツタロン・タン</sup> , 大笛の歌 <sup>パルエジー・チン</sup> の題名	178 <sup>16</sup>	27 <sup>17</sup>
7巻	大歌 <sup>デージー</sup> , 四穴音 <sup>レドゥエタンカッ</sup> 付着歌 <sup>テーボエ</sup> <sup>18</sup> , 精霊を招く四音朗詠詩 <sup>ルータ</sup> , 精霊を招きなだめる歌 <sup>ルータ</sup> , 歌声のよい精霊歌 <sup>ティエユエターヤーディ・ナツ・チン</sup> をお供えされる15名の大精霊 <sup>リン・ガム</sup> の四行古詩の題名		
	大歌	20	0
	四穴音付着歌	33	8 <sup>19</sup>
	精霊を招く四音朗詠詩	4	0
	精霊を招く弦歌	8	0
	精霊をなだめる歌	3	2
	歌声のよい <sup>20</sup> 精霊歌	57	3
合計	(125)		

- 9 ジャンルの定義については、『ミャンマー音楽用語事典』[Khin Maung Nyunt n.d.] と "Dictionary of Myanmar Performing and Plastic Arts" [Ministry of Culture 2001] に一部が取り上げられて解釈がなされている。
- 10 『題名集』の各見出し前にこのように巻数が示されている。これは、対応する別の貝葉を示し、それらには歌詞も掲載されていると思われる。しかし、筆者が確認できたのは、「2巻」と「4巻」に対応すると考えられる貝葉のみであった [UKMT pe2] [UKMT pe1]。「2巻」に相当すると考えられる貝葉 [UKMT pe2] には「1巻, 大承前歌, 中承前歌, 承前歌, 小承前歌, 精霊承前歌の記録」と記載されているが、その表題から、『題名集』中で「2巻」と表記されているものに相当するものと考えられる。
- 11 貝葉中には「編み歌合計 131」とあるが [NL barnard1076 : kii(w)], 実際の掲載数は 132 篇。
- 12 うち 3 篇は、『ウー・サ』中に 2 回ずつ掲載されている。
- 13 貝葉中には「弦歌合計 179」とあるが [NL barnard1076 : ke(k)], 実際の掲載数は 180 篇。
- 14 貝葉中には「パッピヨー合計 105」とあるが [NL barnard1076 : kay(w)], 実際の掲載数は 103 篇。
- 15 うち 3 篇は『ウー・サ』に 2 回ずつ掲載されている。また 1 篇は「6巻」に分類されている題名と重複。
- 16 貝葉中には「合計 167」とあるが [NL barnard1076 : kaw(w)], 実際の掲載数は 178 篇。
- 17 うち 3 篇は『ウー・サ』に 2 回ずつ掲載されている。また 1 篇は「5巻」に分類されている題名と重複。
- 18 「レドゥエタンカッ・テーボエ」は「四穴音付着歌」と同じであると考えられ、訳語は統一した。四穴音 (レー) で演奏される際、楽器演奏がぴったりと歌に寄り添って (カッ) いるため、こう呼ばれると説明される [Khin Maung Nyunt n.d. : 145]。
- 19 うち 4 篇は「6巻」に分類されている題名と重複。他 4 篇はデイン歌謡の分類にも同じ題名あり。
- 20 ここでは「演奏が美しい」と記載されているが、「7巻」の表題と統一した。



8 卷	タライン族歌謡 <sup>21</sup> , ダウエー地方歌謡, テインガー氏歌謡 <sup>22</sup> , アユタヤ歌謡, ローカナツ・レ歌謡 <sup>23</sup> , 「蓮から出てくる」で始まる作品の音の通りに作られたタライン族歌謡風のデイン歌謡 <sup>24</sup> , 季節詩 <sup>25</sup> , 四音朗詠詩の題名		
	タライン族歌謡	11	3
	ダウエー地方歌謡 <sup>25</sup>	2	0
	テインガー氏歌謡,	4	3 <sup>26</sup>
	アユタヤ歌謡	38 <sup>27</sup>	17 <sup>28</sup>
	デイン歌謡 <sup>29</sup>	51 <sup>30</sup>	35 <sup>31</sup>
	季節詩	9	8
	四音朗詠詩	18	21 <sup>32</sup>
	合計	(133 <sup>33</sup> )	
9 卷	馬術弦歌 <sup>34</sup>	46	1
10 卷	37の精霊, 精霊の王統史, 精霊像の形, 衣装の着方, 精霊歌の叫び方, 供え方, 演奏の仕方, 歌い方, 演じ方の題名	115	1 <sup>34</sup>
	合計	1062	193 <sup>35</sup>

[出典] 貝葉 [NL barnard1076], 貝葉 [UHRC pe465] より筆者作成。

- 21 「タライン族歌謡」とは「モン族の音楽の音を使って書いた歌謡の種類」[Khin Maung Nyunt n.d : 135] である「モン歌謡」のことである [Khin Maung Nyunt n.d : 59]。
- 22 「テインガー氏歌謡」とは, ボードーバヤー王治世 (1781-1819) に宮廷に使えたミン・テインガーという貴族によって最初に作られた形式の詩だといわれている [Myint Kyi 2001 : 139]。
- 23 「ローカナツ」は, 芸術や芸能のシンボルとして用いられる, 世界を守る精霊 [Ministry of Culture 2001 : 106]。「ローカナツ・レ」は, 「ローカナツ歌謡」と同じものと思われる。訳語はローカナツ・レ歌謡とした。「ローカナツ歌謡」は, 「空を飛ぶ象と獅子の喧嘩を音楽によって鎮めたローカナツを指して詠んだ歌謡の種類」と説明される [Khin Maung Nyunt n.d : 146]。
- 24 「ダウエーの人々の旋律を用いて呼んだ歌」[Ministry of Culture 2001 : 58]。
- 25 「ダウエー」はテナセリム管区の地名である。その地域の音楽から旋律を借りて作られた歌謡ではないかと考えられる。
- 26 うち1篇は『ウー・サ』中に2回掲載されている。
- 27 貝葉中には「合計40」とあるが [NL barnard1076 : kha(k)], 実際の掲載数は38篇。
- 28 うち2篇は『ウー・サ』中に2回ずつ掲載されている。
- 29 「デイン歌謡」は「ダウエー地域の人々の旋律に基づいて詠んだ歌」と説明されている [Ministry of Culture 1998 : 58]。
- 30 貝葉中には「合計50」とあるが [NL barnard1076 : kha(w)], 実際の掲載数は51篇。
- 31 うち1篇は『ウー・サ』中に2回掲載されている。うち1つの題名に対してウー・サの作品が2篇ある。
- 32 うち3つの題名に対してウー・サの作品が複数あるため, ウー・サの作品数自体は5篇増えた合計21篇になる。『題名数』に掲載された題名の数よりもウー・サの作品数が多くなるのは, 『ウー・サ』に同じ出だしの複数の別作品が掲載されているため。
- 33 貝葉中には「合計139」とあるが [NL barnard1076 : khaa(k)], 実際の掲載数は133篇。
- 34 「7巻」に分類されている「歌声のよい精霊歌」の1篇と重複。
- 35 それぞれ註に示した重複等を入れず, 表に示した数の合計。

表1に示したように、『題名数』中に記載された題名数は1062篇であった。そのうち、『ウー・サ』にも掲載されている作品は193篇で、『題名数』の18%を超えている。また、『題名数』では第6巻と第10巻をそれぞれひとまとまりと捉えると歌謡作品が20のジャンルに分けられており、そのうち16のジャンルに『ウー・サ』中の作品と一致する題名があることが分かる。ウー・サはジャンルの大部分にわたり、個人として相当数の作品を残していることがいえる。

## 2. 『ウー・サ』(1849)におけるジャンル名のある作品

『ウー・サ』に掲載された作品には、『題名数』の16のジャンルに掲載されている作品の題名と一致しているものが多数ある。そのうち、『ウー・サ』中にも『題名数』と同じジャンル名が記載されているのは、「承前歌」、「編み歌」、「弦歌」、「精霊歌」、「テインガー氏歌謡」、「デイン歌謡」、「季節詩」、「四音朗詠詩」の8つであった。これらのジャンルに『題名数』で分類されている『ウー・サ』中の作品が、『ウー・サ』の中ではどのように記載されているかについて以下検討していく。なお、表中の出だし部分は、歌謡の一節ではなく、呼称される際に区切られる箇所で行切った。句読点で終わる箇所は原文のまま句読点記号 (i, ii) を記載した。『ウー・サ』中で同一作品が複数回掲載されている場合もあるが、その旨を註で示し、作品数を数える際にはそれぞれ数に含めた。

### (1) <sup>タチンガン</sup>承前歌

『題名数』の中で「承前歌」の分類 [NL barnard1076 : kaa(w)-ki(k)] に掲載されている作品の題名は50篇あり、そのうち『ウー・サ』中にも掲載されている作品は4篇あった(表2参照)。

表2 『ウー・サ』中の「承前歌」作品

番号	出だし	頁
10	ソウンターマイナー (စုံသာမြိုင်နယ် <sup>ii</sup> )	ku(w)-kuu(k)
11	ゼーヤーシュエーミエー (ဧယာရွှေမြေ <sup>ii</sup> )	kuu(k)-kuu(w)
12	ユエッフニャーチュエフリヤンレー (ရွက်ညှာကြွေလှိုင်လေး <sup>36</sup> )	UCL pe42332 : ke(w)
18	ディーパーミエーヤン (ဒီပါမြေယံ)	kay.(k)-kay.(w)

[出典] 貝葉 [UHRC pe465], 貝葉 [UCL pe42332], 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

表2の4篇全てが『ウー・サ』において「承前歌」と表記されている。例えば(10)は、「兄君である六牙象の所有者、大正法王の御世の御下命により、緬曆1181年〔西曆1819年〕、王宮の南のバルコニーにおいて、陛下の御前で書いた大承前歌」(下線部は筆者。以下同様)

36 この作品は、1883年写本 [UHRC pe465] には欠落しているが、1902年写本 [UCL pe42332 : ke(w)], 及び、写本年不明の国立図書館蔵の写本 [NL kin351 : kay(w)] には掲載されている。ここでは1902年写本の頁を示した。

[UHRC pe465 : ku(w)] と書かれている。

## (2) 編み歌

『題名数』の中で「編み歌」に分類 [NL barnard1076 : ki(k)-kii(w)] されている作品は132篇あり、そのうち『ウー・サ』にも掲載されている作品は23篇あった(表3参照)。

表3 『ウー・サ』中の「編み歌」作品

番号		出だし	頁
13		レードートウン (လယ်တော်ထွန်)	ke(k)
14-1		サダンパインボウン (ဆဒန်ပိုင်ဘုန်)	ke(k)-ke(w)
14-2		イッタンゲー (ရစ်သန်းငယ်)	ke(w)
23-1	☆	チューティーポエウン (ကြူးသီဘွဲ့ဝန်း <sup>37</sup> )	kaw(k)
23-2	☆	ソープードーポワータフニンレー (စိုးပူတော်ပွားသန့်ငွေလေး <sup>38</sup> )	kaw(k)
32-4		ミンガラーカウンジー (မင်္ဂလာကောင်ကြီး)	khi(w)
32-8		ソープードーポワータフニンレー (စိုးပူတော်ပွားသန့်ငွေလေး <sup>39</sup> )	khii(k)
32-9		チューティーポエウン (ကြူးသီဘွဲ့ဝန်း <sup>40</sup> )	khii(k)-khii(w)
44-17		コンバウンアウンミヨ (ကုန်းတောင်အောင်မျိုး)	guu(w)-ge(k)
46	☆	トウンタウンパインボウンミイン (သုန်းတောင်ပိုင်ဘုန်းမြင့်)	ge(k)
48	☆	ミンガラーアウンフミョウン (မင်္ဂလာအောင်မြို့ <sup>41</sup> )	ge(w)
50	☆	レーヤンゲーディーパーレー (လေးရံငယ်ဒီပါလေး <sup>42</sup> )	gay.(w)-go.(k)
53-4		ンガーロウンタウトウ (ငါးလုံတောင်တု)	gaw(k)-gaw(w)
53-6		ノーダツケーイエーニョーレー (နောဒါတ်ကယ်ရှေ့ညိုလေး)	gaw(w)-gan(k)
53-7		シュエーバイマンゲーレー (ရွှေမိမာန်ငယ်လေး <sup>43</sup> )	gan(k)
53-8		ティースズーミンパウン (ထီးဆူဆူမင်းပေါင်း)	gan(k)-gan(w)
60-1		チャウトウエーヤウンシエイ (ခြေသွယ်ရှောင်ရှိန်)	ghi(w)
89-1	☆	ティンジャンドーミンガラー (သကြီးတော်မင်္ဂလာ <sup>44</sup> )	ngo.(w)
92-2	☆	ンガーマンチュエーボウンミイン (ငါးမာန်ကြွေဘုန်းမြင့်)	nga:(k)
94-1	☆	ナッルーチーフミン (နတ်လူခြံမြင့်)	nga:(k)-nga:(w)
109-1	☆	ティンジャンドーミンガラー (သကြီးတော်မင်္ဂလာ <sup>42</sup> )	suu(w)
109-2	☆	サダンパインレーチュン (ဆဒန်ပိုင်လေးကျွန်း)	suu(w)-se(k)
109-4	☆	ナンヨウングエー (နန်းယုံငွေ)	se(k)

[出典] 貝葉 [UHRC pe465], 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

37 (32-9) と同じ。以下同様の註は、同一作品が『ウー・サ』の中で重複して掲載されていることを示す。

38 (32-8) と同じ。

39 (23-2) と同じ。

40 (23-1) と同じ。

41 (109-1) と同じ。

42 (89-1) と同じ。

表3中、『ウー・サ』中で表題に「編み歌」とジャンル名が記載されているものは11篇あった(表3の☆印)。そのうち、『ウー・サ』中で「タヤー音〔主音〕の編み歌」と記載されている作品が7篇あった(23-1, 23-2, 50, 89-1, 109-1, 109-2, 109-4)。例えば(50)は「チャウミャウン町で献上したタヤー音の編み歌」[UHRC pe465 : gay.(w)]と記載されている。「タヤー・ボエ」は「タヤー歌謡」とも呼ばれ<sup>43</sup>、現在、「編み歌」と同じものであると理解されている[Ministry of Culture 2001 : 53]。

(92-2)と(94-1)の2篇は次のように「編み歌」とのみ記載されている。(92-2)「ヤンキン山の編み歌」[UHRC pe465 : ngan(w)], (94-1)「宝石の御環状太鼓編み歌」[UHRC pe465 : nga:(k)]と記載されている。「ボエ」には「～を編む, 詠む」という意味があり, これら2篇の表題については, それぞれ「ヤンキン山を詠んだもの」「宝石の御サインを詠んだもの」という意味に取ることができる。(46)と(48)の2篇の表題では, 「ボエ」が, 「～を編む, 詠む」という意味で使用されている。例えば(46)は「チャウミャウンの都を詠んだ緩慢歌付きのタヤー歌謡」[UHRC pe465 : ge(k)]と書かれている。

『題名数』の中で「編み歌」として分類されているが、『ウー・サ』中では「編み歌」とは記載されていないものが12篇あった(13, 14-1, 14-2, 32-4, 32-8, 32-9, 44-17, 53-4, 53-6, 53-7, 53-8, 60-1)。例えば, (32-4, 32-8, 32-9)は「緬曆1204年〔西曆1842年〕, 南の庭園の御殿で, タンバウツ<sup>44</sup>歌謡を詠むようにというシュエボー陛下の御下命でミャワデイ卿が書いた新しいタンバウツ歌謡, 西宮の王妃が詠んだ様子」[UHRC pe465 : khi(k)]<sup>45</sup>と書かれている。

『ウー・サ』の中では, 同じ作品が複数回掲載されている場合がしばしば見られた。上に挙げた(32-8)と(32-9)はそれぞれ, 先に挙げた「編み歌」(23-2), (23-1)と同一作品である。しかし, 表題はここで示したように「タンバウツ歌謡」となっており, 同じ作品でも『ウー・サ』の中でジャンル名が一致していない場合がある。

(13)は『ウー・サ』に掲載されているが, マウン・ミンアウンという人物の作品であることが書かれている。そこでは「タヤー音の歌」という表記があり, これは, 先に挙げた「タヤー音の編み歌」の事例から, 「編み歌」と共通する形式を持つものであると思われる。この作品に続いて掲載されている作品(14-1, 14-2)と併せて見てみる。

- (13) 農耕儀礼歌謡。緬曆1152年〔西曆1790年〕, 祖父君である最初の大法王陛下がナヨン月<sup>46</sup>〔西曆1790年5-6月〕にアウンピンレー池の農耕に, 昔のしきたり通りに壮麗に, 王, 王妃, 息子の皇太子, 王族と共に, 金の馬鍬, 銀の馬

43 主音で始まり主音で終わる歌謡 [Ministry of Culture 2001 : 52]。

44 4-3-5音節もしくは4-3-7音節で構成される形式の詩 [Ministry of Culture 2001 : 118]。

45 この説明文以下には合計9篇の歌謡が含まれており, 編み歌は他にも(32-4)「ミンガラーカウンジー」で始まる作品 [UHRC pe465 : khi(w)]が含まれている。

46 ビルマ暦第3番目の月で, 太陽暦の6月頃に相当する。

鍬，白い牛，牛の群れの先導役の牡牛と，にぎやかに農耕儀式にお出かけになられて，御畑を耕した際に，皇太子の御殿の王室金庫の事務官マウン・ミンアウンを皇太子妃の御下命で呼び出し，マウン・ミンアウンが書いた農耕儀式のタヤー音の歌 [UHRC pe465 : kuu(w)-ke(k)]。

(14-1, 14-2) 緬曆 1202 年〔西曆 1840 年〕，シュエポー陛下の治世に農耕儀式の時に至った際，上の農耕儀式の歌をお気に召されず，マウン・サ〔ウー・サ〕が新しく作って献納しなければならないと，南の庭園の御殿で御下命があり，ウンジー〔大臣〕のミヤワディ町元領主〔ウー・サ〕が書いて献納した，農耕儀礼の新しい歌 [UHRC pe465 : ke(k)]。

(13) は農耕儀礼用の歌であり，50 年後にそれを王の命令によってウー・サが新しく作り直したものが (14-1, 14-2) であることが，それぞれの表題から分かる。この二つの作品の旋律は確認できなかったが，先にも述べたように，大歌謡では「アライツ」という技法で既存の作品を書き換えた例が見られることから，(14-1, 14-2) における「新しく作って」の意味は，(13) の旋律を使用して歌詞を書き換えたことを意味すると考えられる。

その他，(53-4)，(53-6)，(53-7)，(53-8) の4篇は，「<sup>ミークエツカ・ジン</sup>燭台舞踊歌」<sup>47</sup> という表題の作品の中に含まれていた。「燭台舞踊歌」は『題名数』には歌謡ジャンルとして登場しないが，『著名歌謡作品全集』ではジャンル名として記載されている [NL 3149 : Dhuu(k)]。また，(44-17) には表題がなく，その他 (60-1) については次のように，この作品が作られた状況のみが次のように記されていた。「ケーパウン長老によって呼び出されて，釈尊を豎琴の演奏と共に詠んで奉納するために書いた〔もので〕，ミインムー村領主が書いた」 [UHRC pe465 : ghi(w)]。

以上見てきたように，『題名数』で「編み歌」に分類されている作品のうち『ウー・サ』にも掲載されたもの 23 篇中 11 篇に「編み歌」とジャンル名が記されており，『題名数』での分類と一致していることが指摘できる。

### (3) <sup>チョー</sup>弦歌

『題名数』において「弦歌」の分類 [NL barnard1076 : kii(w)-ke(k)] に掲載されている作品の題名は 180 篇あり，そのうち『ウー・サ』にも掲載されている作品は 5 篇あった (表 4 参照)。

47 「燭台舞踊」は，「蠟燭の台，もしくは燭台を持って踊る女性の踊り」と説明される [Ministry of Culture 2001 : 88-89]。



表4 『ウー・サ』中の「弦歌」作品

番号	出だし	頁
28-2	ヤンウンユエーニイラー (ရံဝန်းရွှေညိုလှ။)	kha(w)
28-3	ヤンウンユエーニイラー (ရံဝန်းရွှေညိုလှ။)	kha(w)
82-8	アウンチャーミーヤン (အောင်ချာမြေယံ။)	ngu(k)
91-1	トゥンリンテーザー (ထွန်းလင်းတေ။)	ngaw(w)-ngan(k)
167-1	テインサインガ (တိမ်ဆိုင်က။)	nyaa(k)

[出典] 貝葉 [UHRC pe465], 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

このうち『ウー・サ』中に「弦歌」というジャンル名が記載されていたのは (91-1) のみで、「弦歌<sup>チョー・チン</sup>、帝釈天の礼装の音」[UHRC pe465 : ngaw(w)] とある。これは、『題名数』の中では「礼装、王宮の祭事。ドゥータンタヨータン<sup>48</sup>」という題名の次に挙げられており、「そのアライツ、トゥンリンテーザー」と記載されている [NL barnard1076:ku(w)]。「アライツ」と記載されていることから、この作品は「礼装、王宮の祭事。ドゥータンタヨータン」の旋律を用い、歌詞のみを新しく作り変えた作品であることが分かる。

(82-8) は「ピン・ティーピェー。オウツカラーパにおいて、豎琴奏者マウン・クエーがお願いしてミンジーが書いた文章」[UHRC pe465 : ngu(k)] とあり、「弦歌」の作品名の一つとして挙げられる「ピン・ティーピェー」<sup>49</sup>という言葉が記載されている。

(28-2) と (28-3) には、「イーナウン王子。揺り籠に乗せる四音朗詠詩」[UHRC pe465 : kha(k)] と表題があり、「弦歌」とは記載されていない。この2篇は出だしは同じであるが、後半の歌詞は異なっており別作品である。また、(167-1) は「歌」とのみ記されていた [UHRC pe465 : nyaa(k)]。

1篇のみであったが「弦歌」という言葉が『ウー・サ』の中に現れていることから、ウー・サが「弦歌」と呼ばれるジャンル名を把握していたことが分かる。また、ウー・サが「弦歌」において既存の作品の旋律を利用したアライツを作っていることも分かった。

#### (4) 精霊歌

ここでは、精霊(ナツ)に関係したジャンル名をまとめて精霊歌とする。『題名数』において「精霊をなだめる歌」という分類 [NL barnard1076 : kan(k)] に掲載された3篇の作品のうち、『ウー・サ』中にも掲載されている作品は2篇 (57-1, 74)、「歌声のよい精霊歌<sup>チョーユエターヤーディ・ナツ・チン</sup>」に分類 [NL barnard1076 : kan(k)-ka:(k)] されている57篇のうち『ウー・サ』中にも掲載されているものは3篇あった (75-1, 104, 105-1)。また、『題

48 この部分は口唱歌であり、楽器の音を示したもので、言葉としての意味はなさない。

49 「王宮の中(アトゥイン)で起きた事柄を詠んだ弦歌を“アトゥイン・ティーピェー弦歌”と呼び、王宮内ではなく外(アピン)の世界の人々に関する歌謡を“アピン・ティーピェー弦歌”と詠んだ」[Khin Maung Nyunt n.d : 170]。

井上：ビルマ古典歌謡におけるジャンル概念—ウー・サ歌謡集の19-20世紀における貝葉写本の分析を通して—

名数』の中で「10巻」に相当する「37の精霊，精霊の王統史，精霊像の形，衣装の着方，精霊歌の叫び方，供え方，演奏の仕方，歌い方，演じ方の題名」の中に分類[NL barnard1076：khi(k)-khuu(w)]されている115篇のうち『ウー・サ』にも掲載されているものは1篇あり，これは「7巻」中の「歌声のよい精霊歌」に分類されている作品と重複している。これらについて表5に示した。

表5 『ウー・サ』中の「精霊をなだめる歌」，「精霊歌」作品

番号	出だし	頁	『題名数』における区分
57-1	ティックンソウンミヤイン (သစ်ကုန်းစုံဖြူငါး)	ghaa(k)-ghaa(w)	精霊をなだめる歌
74	テーザーテインピャー (တေဇာထိန်ဖြာ)	ghaw(w)	精霊をなだめる歌
75-1	ミアウンゾワーンゲーレー (မင်းအောင်စွာငယ်လေး။)	ghaw(w)-ghan(k)	歌声のよい精霊歌/37の精霊
104	テッレツレツヤー (ထက်လက်လက်ယာ။)	si(w)	歌声のよい精霊歌
105-1	パハニミイヤ (ပဟနိမည်ရ။)	si(w)	歌声のよい精霊歌

〔出典〕貝葉 [UHRC pe465]，貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

(57-1)の表題は，「緬曆1207年〔西曆1845年〕にタンパツ町において，おなだめになられる歌」[UHRC pe465：ghaa(w)]，(74)の表題は，「おなだめになられる歌。ミヤワ<sup>ミンジャー</sup>ディ 脚作」[UHRC pe465：ghaw(w)]となっている。「なだめる」とは，精霊をなだめる意味である。国王や王族に対する敬語表現で記載されていることから，主語は国王であると考えられる。

(75-1)の表題は，「勝つほど大きくない，<sup>ナツ・ティージン</sup>精霊の歌」[UHRC pe465：ghaw(w)]，(104)の表題は，「ガナパティ・マハーペインネー神<sup>50</sup>歌」[UHRC pe465：si(w)]とある。(105-1)の表題は，「〔国王が〕拜みになられる15名の<sup>ナツ・タン</sup>大精霊の四行古詩」[UHRC pe465：si(w)]となっている。(75-1)は、『題名数』の「10巻」中の「37の精霊」に相当する部分にも分類されており，作品には「精霊歌」[NL barnard1076：khi(k)]と記載されている。

以上のように，『題名数』の中で，「精霊をなだめる歌」，「歌声のよい精霊歌」，「精霊歌」に分類される作品のうち『ウー・サ』にも含まれているものは「おなだめになられる歌」，「精霊の歌」，「マハーペインネー神歌」，「大精霊の四行古詩」等と記載されている。ただし，(75-1)は『題名数』の中では「7巻」の「歌声のよい精霊歌」と「10巻」の「37の精霊他」の両方の分類に重複して掲載されていることから，『題名数』における精霊歌の分類は，『ウー・サ』におけるものよりも細分化していることが指摘できる。

### (5) <sup>テインガー・タン</sup>テインガー氏歌謡

『題名数』で「テインガー氏歌謡」に分類[NL barnard1076：ka:(w)]されている4篇のうち『ウー・サ』中の作品は，表6に示した3篇である。

50 もともとはインドのガネーシャ神を示すビルマ語であるが，ビルマでは精霊(ナツ)の一つとして信仰されている。

表6 『ウー・サ』中の「テインガー氏歌謡」作品

番号	出だし	頁
16-1	メードネテインチュー (မယ်တို့နေ့တိမ်ခြေ။)	ke.(k)
16-2	ナンシュエフニャー (နန်းရွှေညွှာ။ <sup>51</sup> )	ke.(k)
165-1	ナンシュエフニャー (နန်းရွှေညွှာ။ <sup>52</sup> )	zha:(w)

[出典] 貝葉 [UHRC pe465], 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

(16-1) の表題は、「兄君陛下の御下命で書いた。テインガー氏歌謡。マンガレーを詠んだもの。1. タモウッタゴータ戯曲において王女王子達が森に出かけて着いた場所を詠んだテインガー氏歌謡」[UHRC pe465 : ke.(k)] となっている。また、(16-2) の表題は、「その後作ったイーナウン〔劇〕に含まれる、マンガレーの場所を詠んだ場面からの〔作品〕」[UHRC pe465 : ke.(k)] となっている。(16-2) の説明にある「その後作った」の部分はこの作品が (16-1) の続きであり、同じく「テインガー氏歌謡」であることを示している。また、(16-2) と (165-1) は同一作品であるが、(165-1) は戯曲中に挿入される形で掲載されており [UHRC pe465 : zha:(w)], 表題は書かれていなかった。いずれにしても、『ウー・サ』の中でも『題名集』の中の分類と同様に「テインガー氏歌謡」とジャンル名が示されていることが指摘できる。

### (6) <sup>デ</sup>イン<sup>ン</sup>歌謡

『題名数』の中で「デイン歌謡」に分類 [NL barnard1076 : kha(k)-kha(w)] されている 51 篇のうち、『ウー・サ』にも掲載されている作品は 35 篇であった (表7 参照)。

表7 『ウー・サ』中の「デイン歌謡」作品

番号	出だし	頁
29-4	テインテインピャー (ထိန်ထိန်ဖြူ။)	khaa(k)-khaa(w)
34-66	レーシュエーウツプインサイン (လဲရွှေဝတ်ပွင့်ဆိုငံ။ <sup>53</sup> )	ga(w)
36-1	ピャウンシュンウエーサー (ပြောင်ရွှန်းဝေဆာ။)	gaa(w)
37-1	ティーシュエーフミイエイツウエー (သီးရွှေမှည့်ရိပ်ဝေ။)	gaa(w)-gi(k)
42-1	コンバウンネーミン (ကုန်းဘောင်နေမင်း။)	gii(w)
43-1	アウンゼーヤー (အောင်ဇေယာ။)	gu(k)
53-1	ヤモンティーター (ယမုန်သီတာ။)	go.(w)-gaw(k)

51 (165-1) と同じ。

52 (16-2) と同じ。

53 (108) と同じであるが、出だしは「レー le : 」と「レ le.」と声調が異なっている。貝葉中で綴りが統一されていないことは珍しくなく、同じものを示していると考えられる。

番号	出だし	頁
53-11	ルンアウンクゴー (လွမ်းအောင်ခုကို။)	gan (w)
56-1	ソーアンボウンフムー (စိုးအမွဲမြူး။ )	gha (w)-ghaa (k)
56-2	ニュッピョルボエー (ညွတ်ပြုလုဘွယ်။)	ghaa (k)
61	ニヤーイユエーンゲーフニン (ညာရည်ရွေငယ်နှင့်)	ghii (k)-ghii (w)
62	シュエーティンカー (ရွှေသင်္ခါ။)	ghii (w)
63-1	コーネートウエーサン (ကိုးနယ်ထွေဆန်း။ )	ghii (w)-ghu (k)
69	ナンチャーナッスウエー (နန်းကြာနတ်ဆွေ)	ghe (w)-ghay. (k)
79-1	テインテインピャーポー (ထိန်ထိန်ဖြာဝိုး)	gha: (w)
79-4	レトウエーゲーミエツヤン (လဲသွေးငယ်မျက်ရံ။)	nga (k)
81-4	ミヤインヤゴン (မြိုင်ရဂုံ။)	ngi (w)
82-6	ナンドゥーピョーピャウン (နန်းသူဖျော်ပြောင်း။)	ngii (w)
84-11	ニュッピョールボエー (ညွတ်ပျိုလုဘွယ်။)	nge (w)
88-2	タビエーニャーミヤンバウン (သပြေညာမြန်ဘောင်။)	ngo. (k)
107-1	ダザウンシュエータイン (တန်ဆောင်ရွှေတိုင်။)	su (k)-su (w)
107-3	アウンゼーヤーチュンチュンゲー (အောင်ဇေယျကျွန်းကျွန်းငယ်)	su (w)
108	レシュエーウップインサイン (လဲရွှေဝတ်ပွင့်ဆိုင်။ <sup>54</sup> )	suu (k)-suu (w)
110-4	テインテインピャーチュンチュン (ထိန်ထိန်ဖြာကျွန်းကျွန်း)	se (w)
111-1	ヤウエーティンガーティンガー (ရဝေသိင်္ဂါသိင်္ဂါ။)	say. (k)
115-1	アウンミエーゼーヤーリンティン (အောင်မြေဇေယျလင်းထိန်)	saw (k)
115-3	フマンユエーニラー (မှန်ရွှေညီလာ)	saw (k)
116-1	チャーナンナッမေး (ကြာနန်းနတ်မယ်။)	saw (w)
122	ダザウンティンガー (တန်ဆောင်သိင်္ဂါ)	sha (w)-shaa (k)
123	カンシュエーミエーゲーガター (ကန်ရွှေမြေငယ်ကသာ။)	shaa (k)
129-1	バンフモウンチュエー (ပန်းမှုံကြွေ။)	shii (w)-shu (k)
131-1	アウンゼーヤー (အောင်ဇေယျ။)	shu (w)-shuu (k)
132-1	ボウンヤウンシェインフリヤンニヤー (ဘုန်းရောင်ရှိန်လျှံညီ။)	shuu (k)
133-1	イユウエーユウエーフニンレー (ယည်ရွှေရွယ်နှင့်လေ။)	shuu (k)-shuu (w)
133-3	ゴーゴーズインレーンゲーフニン (ဂေါ်ဂေါ်ဇင်လေငယ်နှင့်)	shuu (w)

[出典] 貝葉 [UHRC pe465], 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

表7に掲げた35篇のうち、『ウー・サ』の中で「デイン歌謡」と記載されているものは

54 (34-66) と同じである。

7篇あった(37-1, 61, 108, 123, 129-1, 133-1, 133-3)。筆者が「デイン歌謡」と訳したものは、『題名数』では「デイン」とのみ記載されているが、『ウー・サ』の中では「デイン・チン(歌)」、「デイン・タン(デイン音楽, 歌)」などと記載されている場合があった。「歌」を意味する「チン chin」と「タン than」は同一の意味と使用方法として捉えることができると考えたため、訳語は統一し、原語の違いはルビに示した。『題名数』で「デイン」に分類された作品のうち『ウー・サ』にも含まれるもので「デイン・チン」とのみ記載されているものは、(37-1), (108), (123)の3篇であり、「デイン・タン」とのみ記載されているものは、(133-1), (133-3)の2篇であった。(61)は「<sup>デイン・チン</sup>デイン歌謡。タンパツ宮殿で献上した」[UHRC pe465: ghii(k)]と書かれ、(129-1)は「池からの帰りに、緊那梨が歌った<sup>デイン・チン</sup>デイン歌謡」[UHRC pe465: shii(w)]と書かれている。

その他、「燭台舞踊歌」と記載されているものが11篇(42-1, 53-1, 53-11, 63-1, 107-1, 107-3, 115-1, 115-3, 116-1, 122, 132-1)あった。また、(62), (110-4), (131-1)<sup>55</sup>の3篇には「ローカナツ・レ歌謡」と記載されており、(29-4), (43-1), (79-1)の3篇は、「レ歌謡」と書かれている。「レ歌謡」の定義については確認できなかったが、さきほど「ローカナツ・レ」と記載されている例を見たことから、「ローカナツ歌謡」と共通する形式を持っているのではないかと考えられる。例えば(29-4)は、「僧院での喜捨祭にて献上した吉祥の四音朗詠詩とレ歌謡」[UHRC pe465: kha(w)]とある。

また、「蓮の踊りの歌」とあるものが2篇(36-1, 111-1)、「蓮から出てくる歌」とあるものが1篇あった(69)。これらは、戯曲の中で王女が蓮から出てくる様子を詠んだものと考えられる。

(56-1)と(56-2)については、次のように「歌謡」とのみ記載されていた。(56-1, 56-2)「緬曆1207年〔西曆1845年〕、タンパツ町で、御下命があつて書いた歌謡集<sup>56</sup>」[UHRC pe465: gha(w)]。また、その他の作品(34-66), (53-11), (79-4), (81-4), (82-6), (84-11), (88-2)には、表題はなかった。

以上見てきたように、『題名数』で「デイン歌謡」に分類されている作品のうち『ウー・サ』にも掲載されている35篇中7篇に「デイン歌謡」とジャンル名が記されており、『題名数』での分類と一致している。

## (7) 季節詩

「季節詩」については、『題名数』中に記載された9篇[NL barnard1076: kha(w)]のうち8篇が『ウー・サ』に掲載されていた(表8参照)<sup>57</sup>。季節詩はビルマ文学において

55 この作品では、「レ・ローカナツ」となっており、他の「ローカナツ・レ」と逆になっているが、同じものと考えて訳した。「ローカナツ・レ」については註23を参照。

56 ここでの「歌謡集」は、一冊の書物ではなく、「複数の歌謡」を示す。

57 季節詩は代表的な詩形の一つであり、この時代には既に数多くの作品が作られていたが、歌謡として歌われる季節詩が『題名数』に記載されたと考えられる。例えば、ウー・サの「コンバウンパラメー」で歌詞が始まるパッピョーの間には季節詩が挟まれており、歌として歌われる。歌謡の歌詞も韻文であるが、韻詩ジャンルのような押韻規則を持たない。



井上：ビルマ古典歌謡におけるジャンル概念—ウー・サ歌謡集の19-20世紀における貝葉写本の分析を通して—  
 主要な韻詩形式の一つであり、四音一行で構成され押韻規則を持つ。

表8 『ウー・サ』中の「季節詩」作品

番号	出だし	頁
40-1	シュエーボウンテインピャー (ရွေဘုန်းထိန်ဖြူ။)	gii(k)
40-2	ネーフノウンシェインワー (နေနှင်းရှိန်ဝါ။)	gii(k)
40-3	スウェーチョウンチェインカー (ရွေခြံချိန်ခါ။)	gii(k)-gii(w)
136-1	ゼーヤミンガラー (ဧယမင်္ဂလာ။)	she(w)
136-2	シュエーフリヤンミンガラー (ရွေလှိုင်မင်္ဂလာ။)	she(w)
136-3	ミェーコウンミンガラー (မြေကုံမင်္ဂလာ။ <sup>58</sup> )	she(w)
137-2	マチャーマピャー (မခြားမပြား။)	shay.(k)
137-3	ザガーフナナー (စကားနှင်း။)	shay.(k)

[出典] 貝葉 [UHRC pe465], 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

季節詩は通常3篇で一つの作品を構成し、各篇の出だしの4音と最後の4音が韻を踏むなど、3篇が関連をもって作られている。(40-1), (40-2), (40-3)には筆者はそれぞれ番号を当てたが、この3篇で一つの作品を構成する。(137-2), (137-3)は2篇であるが、『題名数』には記載されていない『ウー・サ』中の(137-1) [UHRC pe465: she(w)-shay.(k)] と合わせて3篇構成であると考えられる。

表8の8篇全てが『ウー・サ』の中で「季節詩」と記されていた。例えば、(136-1), (136-2), (136-3)は「ミインムー町領主マハーティーリゼーヤトゥラ [ウー・サ] が献納した3篇構成季節詩。30行。1208年ダバウン月<sup>59</sup> [西暦1847年3月], 王妃の沐浴の季節詩, マハーティーリゼーヤトゥラが献納した20行。81歳の時に書いて献納した季節詩」[UHRC pe465: she(w)] と書かれている。

#### (8) <sup>ルーター</sup>四音朗詠詩

『題名数』で「四音朗詠詩」に分類 [NL barnard1076: kha(w)-khaa(k)] されている作品18篇のうち、『ウー・サ』にも掲載されているものは21篇あった(表9参照)。

58 他の写本では「ミェーチャンミンガザー (မြေကုံမင်္ဂလာ)」 [UCL pe42332: sho.(k)] [NL kin351: za:(w)] となっているが、文字の形が似ていることからいずれかが筆写間違いと思われる。

59 ビルマ暦の第12番目の月で、太陽暦の3月頃に相当する。

表9 『ウー・サ』中の「四音朗詠詩」作品

番号	出だし	頁
27	シユエーボウンチェッタエー (ရွှေဘုန်းကြက်သရေ။)	ka:(w)-kha(k)
34-61	ニユンランチェッタエー (ညွန့်လန်းကြက်သရေ။)	ga(k)
34-62	チェッタエーニユンブー (ကြက်သရေညွန့်ဘူး။)	ga(k)
34-63	ニユンブーウေးヤン (ညွန့်ဘူးဝေယန်။)	ga(k)
41-2	ウィザヤーインチュエー (ကိုယောရင့်ကြေး။)	gii(w)
49-1	コンバウンゼーヤー (ကုန်းဘောင်ဇော။)	ge(w)
49-2	マウエーセックワー (မေးဆက်ကွာ။)	ge(w)-gay.(k)
49-3	テッスィーパナワー (ထက်စည်ပန်ဝါ။)	gay.(k)
67-1	ポンドーパラメー (ဘုန်းတော်ပရမေ။) <sup>60</sup>	ghuu(k)-ghuu(w)
68-1	ポンドーテーザー (ဘုန်းတော်တေဇာ။)	ghe(k)
68-2	ニヤートウンダリー (ညာသုန္ဒရီ။)	ghe(k)
68-3	ディーパーミエーヤン (ဒီပါမြေယံ။) <sup>61</sup>	ghe(k)
82-3	テッスィーパナワー (ထက်စည်ပန်ဝါ။)	ngii(k)-ngii(w)
85-1	ディーパーミエーヤン (ဒီပါမြေယံ။)	nge(w)
106-5	マウエーセッカー (မေးဆက်ကာ) <sup>62</sup>	su(k)
113-1	ポンドーパラメー (ဘုန်းတော်ပရမေ။)	so.(k)
113-3	マウエーセッカー (မေးဆက်ကာ။)	so.(w)
130-1	ポンドーパラメー (ဘုန်းတော်ပရမေ။)	shu(w)
140-1	ポンドーパラメー (ဘုန်းတော်ပရမေ။)	shay.(w)
140-2	ニユンブーミンガラー (ညွန့်ဘူးမင်္ဂလာ။)	shay.(w)-sho(k)
140-3	サダンエインダマー (ဆဒန်ရိန္ဒမာ။)	sho(k)

[出典] 貝葉 [UHRC pe465], 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

表9にまとめた21篇中17篇の表題に『ウー・サ』の中で「四音朗詠詩」とジャンル名が記されている(27, 41-2, 49-1, 49-2, 49-3, 67-1, 68-1, 68-2, 68-3, 82-3, 85-1, 113-1, 113-3, 130-1, 140-1, 140-2, 140-3)。例えば(27)は「イーナウン劇中の四音朗詠詩・レ歌謡。女官たちが奏上したもので、ミヤワディ<sup>ミンジー</sup>卿が詠んで献納した」[UHRC pe465 : ka:(w)]とある。

『ウー・サ』の中で「四音朗詠詩」と書かれていない作品は4篇(34-61, 34-62, 34-

60 (113-1), (130-1), (140-1)と出だしが同じであるが、第2, 第3節以降の歌詞が異なり別作品である。

61 (85-1)と出だしが同じであるが、第2節以降の歌詞が異なり別作品である。

62 (113-3)と出だしが同じであるが、第3節以降の歌詞が異なり別作品である。

63, 106-5)である。(34)の表題のもとには68篇の作品が含まれており、その中の(34-61), (34-62), (34-63)の3篇が『題名集』の中では「四音朗詠詩」に分類されている。(34)の表題は、「マンヤー王女。ケインナラーハンタ王宮のコウンダラー池に下りるところを詠んだ歌」[UHRC pe465 : khuu(k)]となっている。(106-5)は、「刻み記録された折り畳み写本中の歌謡集。そこから書き始めた。緬暦1202年〔西暦1840年〕、シュエボー陛下の御代に書いた」[UHRC pe465 : sii(w)]と書かれている。

以上から、「四音朗詠詩」については、ジャンル名が記載されていない例は4篇で、ほとんどの作品が『ウー・サ』の中でジャンル名が説明されていることが分かる。

本節では、1849年の『ウー・サ』中の作品と1870年の『題名数』を比較し、『題名数』中でのジャンル名が『ウー・サ』中でも記載されているものについて見てきた。「承前歌」, 「編み歌」, 「弦歌」, 「精霊歌」, 「テインガー氏歌謡」, 「テイン歌謡」, 「季節詩」, 「四音朗詠詩」の8つのジャンルについては、それらのジャンル名が『ウー・サ』にも登場しており、1870年の『題名数』におけるジャンル分類と一致している例が見られることが分かった。

### 3 『ウー・サ』(1849)におけるジャンル名のない作品

『題名数』に分類されている作品で『ウー・サ』にも含まれている作品のうち、『題名数』に記載されているジャンル名が『ウー・サ』には記載されていないものは、「パッピョー」, 「四穴音付着歌」, 「タライン族歌謡」, 「アユタヤ歌謡」, 「馬術弦歌」の5つのジャンルであった。これらに分類されるウー・サの作品が、『ウー・サ』中でどのように記載されているかについて本節では見ていく。

#### (1) パッピョー

『題名数』で「5巻」に相当する「パッピョー」に分類[NL barnard1076 : ke(w)-kay(w)]されている103篇のうち、『ウー・サ』にも掲載されているものは表10に示した32篇であった。うち、(53-12)は「6巻」にも重複して掲載されていた。

表10 『ウー・サ』中の「パッピョー」作品

番号	出だし	頁
3-1	フマインピャーフモウンウエー (မိုင်းပြာပွဲဝေ။)	ki(k)
4-1	アトゥードウーゲーフニン (အထူးထူးငယ်နွဲ့။)	ki(w)-kii(k)
7-1	ターサンヤゴンボエ (သာဆန်းရုံဇွဲ။)	kii(w)-ku(k)
30-1	ソウンネーターゾフ (စုံနယ်သာစွဲ။)	khaa(w)
32-6	ダバウンサンディフニン (တပေါင်းဆန်းသည့်နွဲ့။)	khii(k)
33-7	ミヤインヤン (မြိုင်ယံ။)	khu(k)
33-9	ラウンパンガモンイン (လောင်းပန်းဂမုံးအင်)	khu(k)-khu(w)

番号	出だし	頁
33-11	リンインゲレー (လင်းယည်ငယ်လေ)	khu(w)-khuu(k)
34-2	オーミンレサン (အိုမြင်လဲဆန်း)	khuu(k)
34-7	フマーライツケレー (မှာလိုက်ကဲ့လေ။)	khuu(w)
34-21	エーチューチャインティン (ဧကြူကြိုင်သင်း)	khe(w)
34-24	スィンヤインゲレー (ဆင့်ရရင့်ငယ်လေ <sup>63</sup> )	khe(w)-khay:(k)
34-31	カーヌエーワタン (ခါနွေဝသံ။ <sup>64</sup> )	khay:(w)
44-1	コンバウンパラメー (ကုန်ဘောင်ပရမေ။)	gu(w)
44-9	ミャンバウンパラメー (မြန်ဘောင်ပရမေ။)	guu(k)
53-9	ターティッケーレーク (တာသစ်ကယ်လေကူး)	gan(w)
53-12	ターゲインマン (တာဂိန်မာန်။)	gan(w)
53-14	セインチャウンニーラー (စိန်ကြောင်နီလာ)	gan(w)-ga:(k)
54-2	フニンレーガトウエー (ညှင်းလေကသွေး။)	ga:(k)-ga:(w)
66-4	チュンチュンタインカン (ကျွန်းကျွန်းတိုင်းခန်း။)	ghuu(k)
72-4	パラメーニヤンムン (ပရမေညာဏ်မွန် <sup>65</sup> )	ghaw(k)
76-1	セツラゲーピョーバーロー (စက်လငယ်ပြော်ပါလို။)	ghan(w)
78-2	パラメーニヤンムン (ပရမေညာဏ်မွန်။ <sup>66</sup> )	gha:(k)
83-1	セインチレシン (စိမ်းကြည်လဲရှင်း။)	ngu(w)-nguu(k)
92-1	タウンナンシュエバイマン (တောင်နန်းရွှေမိမာန်။)	ngan(w)-nga:(k)
95-1	ピンウンニヤータピエー (ပင်ဝန်းညာသပြေ။)	sa(k)
97-1	クワピヤーティン (ခွာပြာသင်း)	sa(w)-saa(k)
105-7	パラメーシュエーニヤン (ပရမေရွှေညာဏ်)	sii(k)-sii(w)
112-1	ソービタフニン (စောဘိသန့်။)	say.(w)
160-1	スィンヤインゲレー (ဆင့်ရရင့်ငယ်လေ။ <sup>67</sup> )	zhay:(k)
162-2	ニョーニョーゲーサインザインレー (ညှို့ညှို့ငယ်ဆိုင်းဆိုင်းလေ။)	zhaw(w)
170-1	カーヌエーワタン (ခါနွေဝသံ။ <sup>68</sup> )	nyu(w)

[出典] 貝葉 [UHRC pe465], 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

63 (160-1) と同じ。  
 64 (170-1) と同じ。  
 65 (78-2) と同じ。  
 66 (72-4) と同じ。  
 67 (32-24) と同じ。  
 68 (34-31) と同じ。

『ウー・サ』の中では、一つの表題の後に複数の作品が続けて掲載されている場合が多く見られる。例えば、ある表題の後に5篇の作品が掲載されている場合、その5篇が直前の表題に関係があると考えられる場合もあれば、表題との関係が不明な作品もある。表10に示したパッピョーに分類される作品も、そのように複数の作品の中にも含まれ、直接表題が付けられていない場合が多く見られた。

『題名数』でパッピョーに分類された作品のうち『ウー・サ』にも含まれるものは、『ウー・サ』中では、「歌 (thachin)」、「～歌 (chin, thachin)」と表記されている例が多く見られた。「歌 (thachin)」とのみ記されているものは(160-1)、(162-2)、(170-1)の3篇あった。その他の例は以下の通りである。

(3-1) その年にエインダウダであるイーナウン劇をお書きになられたところ、ポウツパ王女の父君のダーハー王、王妃、王女らとウィリッサマーヤー山へ精霊にお供えするために出かけた際、水の流れの上で楽しんでいる。水の歌 [UHRC pe465 : ki(k)]。

上の作品の次に「その年に(中略)イーナウン劇をお書きになられたところ」[UHRC pe465 : ki(k)-ki(w)]との表題の後に作品が1篇掲載された後、(4-1)には「その森の歌」と表題がある [UHRC pe465 : ki(w)]。ここでの「その」の意味は、直前の作品の「イーナウン劇」中の作品であるという意味である。

(33-7)、(33-9)、(33-11)、(95-1)の4篇(うち33-7、33-9、33-11は表題を共有)は戯曲中の作品であり、表題には戯曲の場面が示されている。(95-1)は、「マダヤー国の踊り子の女性が歌う歌」[UHRC pe465 : sa(k)]と記載され、(33-7、33-9、33-11)は、「カーラン国においてザガーネインヤツ王女を詠み堅琴で演奏した歌」[UHRC pe465 : khii(w)]と記載されている。

(72-4)については次のように書かれている。「ミヤワディ町領主ミンジー・マハーティハトゥラ [ウー・サ] が詠んだ、兄君陛下の治世にウィザヤヤンティ仏塔を献納する祭で、仏塔の基台で青年らが読んで献納した歌」[UHRC pe465 : gho.<sup>69</sup>(k)]。(72-4)は「戯曲中の音楽」[UHRC pe465 : gha:(k)]という表題に続く作品の(78-2)と同一である。

先に「四音朗詠詩」でも分類された(34)の作品の表題以下に、『題名数』で「パッピョー」に分類されているものが5篇(34-2、34-7、34-21、34-24、34-31)含まれていた。

(7-1)は「緬曆1164年〔西曆1802年〕、ミンゲンの東側で皇太子がお暮らしになられた時に書いた文章」[UHRC pe465 : kii(w)]とある。(30-1)は、戯曲中の歌で「森林の場面」[UHRC pe465 : khaa(w)]と書かれている。

現在「パッピョー」として名高い(44-1)と(44-9)については、『ウー・サ』[UHRC pe465 : gu(w)]においては表題がなかった。

---

69 原語の綴りは「gho」となっているが、貝葉の頁順としては「gho.」に相当する。



その他「編み歌」と記載されたものが3篇あった。(76-1)「タヤー編み歌」[UHRC pe465 : ghan(k)], (83-1)「池の<sup>ボエ・チン</sup>編み歌」[UHRC pe465 : ngu(w)], (92-1)「ヤンキン山の編み歌」[UHRC pe465 : ngan(w)]の3篇である。

(32-6)は、先に「編み歌」にも分類された(32-4, 32-8, 32-9)の表題中の作品である。このことから、ウー・サが編み歌と理解していたものが後にパッピョーとされていることが分かる。

次の作品は、「タンザン(新奇な音)」と記載されている。当時における、新しいタイプの歌としてウー・サが捉えていることが分かる。

(97-1) 御環状太鼓を詠んだタンザン(新奇な音) [UHRC pe465 : sa(w)]。

次の作品は、「アライッ」として作られたことが分かる。

(112-1) ルンダレのアライッ [UHRC pe465 : say.(w)]。

上記の「ルンダレ」で始まる元歌は、『題名数』の中で「パッピョー」に分類されている[NL barnard1076 : ke(w)]。これは『ウー・サ』の中には見当たらなかったが、『著名歌謡作品全集』ではウー・サの作と書かれている[NL 3149 : sha(k)]。ウー・サの作品ではないものが後にウー・サの作品として伝えられた可能性も考えられる。

その他、(53-9), (53-12), (53-14)の3篇は「(53) 燭台舞踊歌」[UHRC pe465 : go.(w)]という表題の作品に含まれる。(54-2)は「<sup>テージー</sup>大歌, <sup>テーボエ・タン</sup>歌を詠んだ音」[UHRC pe465 : ga:(k)]中に含まれ、(66-4)は「アマラプラ〔王都〕の黄金開く吉祥の四音朗詠詩」[UHRC pe465 : ghu(w)]中に含まれる。また、(105-7)は「〔国王が〕拝みになられる15名の大精霊の四行古詩」[UHRC pe465 : si(w)]と説明される作品に含まれる。

以上、『題名数』の中で「5巻」の「パッピョー」に分類されている作品32篇が、『ウー・サ』の中でどのように記載されているかを見てきた。『ウー・サ』の中では「パッピョー」という言葉は使用されておらず、代わりに「歌」「～の歌」とのみ説明されているものが16篇であり、大多数を占めた。

『題名数』中、「6巻」に当たる部分[NL barnard1076 : kay(w)-kaw(w)]にはパッピョー他のジャンルも記載されている。この中ではジャンルごとに分類されていないためどれが「パッピョー」なのかははっきりとは判別できない。これらは、表11と表12にまとめたように27篇あった。表12は、「四穴音付着歌」にも重複して分類されている作品である。

表 11 『ウー・サ』中の「戯曲中のパッピョー， 変わり歌・緩慢歌， 緩慢歌， 重畳歌， 季節を詠んだ主音回帰四行詩， 田舎の人々の生活の主音回帰四行詩， 夫哀歌， 変わり夫哀歌， 一個の石の歌， 大笛の歌の題名」作品

番号	出だし	頁
32-7	シュタインゲター (ရှုတိုင်ငံငယ်သာ။)	khii (k)
34-1	カンミンカター (ကန်မင်းကသာ)	khuu (k)
34-13	フニンフニンゲターニャン (ညှင်းညှင်းငယ်သာညှံ။)	khe (k)
34-18	フニングエーヨーヨー (နှင်းငွေရောရာ။)	khe (w)
34-28	セインチューチュータン (စိန်ဖြယ်ခြူးသန်း။ <sup>70</sup> )	khay: (k)
34-32	イエーフラインガモ (ရေလှိုင်းကမိုဝ်။ <sup>71</sup> )	khay: (w)
34-34	オーチョソウンゲー (အိုကြော့ဆုံးငယ်။)	khay: (w)
34-39	テートーミヤッレーンゲ (သေသော်မြတ်လေ့။)	kho. (k)
34-48	ピャンピャンゲーティンティン (ပျံ့ပျံ့ငယ်သင်းသင်း။)	khan (k)
34-50	スッピーヤンゲーチューエ (ဆွတ်ပျံ့ငယ်ချွေ။)	khan (k)-khan (w)
34-51	ティンヤミイバンバン (တင်ရမည်ဘန်ဘန်။)	khan (w)
34-52	ティンフラビートウエートウエー (တင်လှပြီသွယ်သွယ်)	khan (w)-kha: (k)
34-54	トウンヤンフルン (သုန်းယံလွန်။)	kha: (k)
59-1	コーミェッケーヤウンフヌエー (ကိုယ်မြက်ကယ်ရောင်နှယ်။)	ghi (k)
59-7	ピャンヤヤンゲーレーティンティン (ပျံ့ရရံငယ်လေသင်းသင်း။)	ghi (w)
75-4	ニョーティンタインヨウン (ညှိသင်တိုင်းရုံ။)	ghan (k)
78-3	プーヤデーバンバン (ပူရတယ်ဘန်ဘန်။)	gha: (k)-gha: (w)
80-7	タウンナンバンエイツミヤイン (တောင်နန်းပန်းရိပ်မြိုင်။)	ngaa (w)
154-1	チョソウンゲーミインフラープ (ကြော့ဆုံးငယ်မြင်လှာဘူး။)	zaw (k)-zaw (w)
155	ミヤタルンゲーフマー (မြသလွန်ငယ်မှာ။)	zan (k)
157-4	オーシュサンシュエーナン (အော်ရှုဆန်းရွှေနှန်)	zhaa (k)
168-1	セインチューチュータン (စိန်ဖြယ်ခြူးသန်း။ <sup>72</sup> )	nyi (k)
169-1	イエーフラインガモ (ရေလှိုင်းကမိုဝ်။ <sup>73</sup> )	nyii (k)-nyii (w)

[出典] 貝葉 [UHRC pe465]， 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

70 (168-1) と同じ。

71 (169-1) と同じ。

72 (34-28) と同じ。

73 綴りが一部異なるが (34-32) と同じ。

表 12 「6巻」と「四穴音付着歌」の両方に分類されているもの

15	テーテーゲーティ (သေးသေးငယ်ငယ်)	ke(w)-ke.(k)
34-37	ダズインクワーピャー (သဇင်ခွာပြာ <sup>74</sup> )	kho.(k)
170-2	テーテーンゲーティ (သေးသေးငယ်ငယ်)	nyu(w)-nyuu(k)
173-1	ダズインクワーピャー (သဇင်ခွာပြာ <sup>75</sup> )	nyay:(k)

[出典] 貝葉 [UHRC pe465], 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

(32-7) は、先に、編み歌について検討した際に分類された (32-4, 32-8, 32-9) の表題に続く作品に含まれる。これは、歌詞の形式から、その前に掲載された「パッピョー」に分類される「(32-6) ダバウンサンディフニン」の終末部の主音回帰詩 (タピャン) であると考えられる。

先に四音朗詠詩の箇所挙げた作品 (34) の説明文以下の 12 篇 (34-1, 34-13, 34-18, 34-28, 34-32, 34-34, 34-39, 34-48, 34-50, 34-51, 34-52, 34-54) が、『題名数』の中で「6巻」に相当する部分に掲載されている。

その他の表題を列举すると、次の通りである。(15) 「タモウツダゴータ王子王女らが海を渡る歌」[UHRC pe465 : ke(w)], (59-1, 59-7) 「カーラン国でウィラダー王女にヤーヤン王子が夜に催眠術をかけて御殿へ着き、ご就寝なさるための寝台の上で目を覚まさないでいる間、ヤーヤン王子は王女が熟睡しているのをじっと見つめて非常に可哀相に思っ  
て恋しく詠んだ歌」[UHRC pe465 : ghi(k)], (75-4) 「勝つほど大きくない、精霊の歌」[UHRC pe465 : ghaw(w)], (78-3) 「戯曲中の音楽」[UHRC pe465 : gha:(k)], (80-7) 「大山の猿王ミンシンピューラの精霊兄弟の歌」[UHRC pe465 : nga(k)], (154-1) 「竖琴を演奏する歌」[UHRC pe465 : zaw(k)], (155) 「女官らが歌う歌」[UHRC pe465 : zan(k)]。その他、(157-4), (168-1), (169-1), (170-2), (173-1) の 5 篇は「歌」とのみ記載されていた。

以上、見てきたように、『題名数』で「6巻」に相当する作品も『ウー・サ』の中で、「パッピョー」とは記載されておらず、「5巻」部分と同様に、「～の歌」とのみ記載されている場合が多く見られた。『ウー・サ』の刊本では貝葉写本の『ウー・サ』中の (42), (43), (44) の 3 篇について、「パッピョー」と記されているが [Zwe Sape Press 1967 : 59 (作品番号 42, 43), 60 (作品番号 44)], これは刊本にする際に書き加えられた可能性が高い。

また、『ウー・サ』の中で注目したいのは、(97-1) で「タンザン (新奇な音)」という言葉が登場することである。これは「クワピャーティン」で始まる作品<sup>76</sup> [UHRC pe465 : sa(w)-saa(k)] に付されていた。この作品は、現在「パッピョー」の代表的な作

74 (173-1) と同じ。

75 (34-37) と同じ。

76 これは、環状太鼓作りに興味を持っていたターヤーワディー王 (治世 1837-46) の環状太鼓を讃えた歌とされる [Myint Kyi 2001 : 202]。

井上：ビルマ古典歌謡におけるジャンル概念—ウー・サ歌謡集の19-20世紀における貝葉写本の分析を通して—

品の一つとして著名なものである。ウー・サは、後にパッピョーに分類される作品を「新  
奇な音」として認識していたことが分かる。

## (2) <sup>レドゥエタンカッ</sup>四穴音付着歌

『題名数』で四穴音付着歌に分類 [NL barnard1076 : kaw(w)-kan(k)] されている 33 篇のうち、『ウー・サ』中にも掲載されている作品は 8 篇あった。しかし、いずれもパッピョーもしくはデイン歌謡の分類の中にも同じ出だしの作品があり、どちらに分類できるか不明であった。このことから、パッピョー、四穴音付着歌、デイン歌謡は同じ形式のものから細分化されたジャンルである可能性がある。また、四穴音付着歌という言葉は、『ウー・サ』の中には登場しなかった。

表 13 にまとめた 4 篇は、本稿第 2 節 (6) 「デイン歌謡」にも分類されているものである。また、表 14 にまとめた 4 篇 (うち 2 篇は同一作品) は、第 3 節 (1) 「パッピョー他」にも分類されたものであり、表 12 と同一である。

表 13 『ウー・サ』中の「四穴音付着歌」と「デイン歌謡」の両方に分類されている作品

番号	出だし	頁
55-1	ユエーニーラーチャーシュンウエーパ (ရွှေညိုလာကြာရွှန်းဝယ်ဝါ)	ga:(w)
81-5	ユエーニーラーニャーユンウエーパ (ရွှေညိုလာညာရွှန်းဝယ်ဝါ)	ngi(w)-ngii(k)
83-2	ユエーニーラーフマーフマ (ရွှေညိုလာမှာမာ)	nguu(k)
114-1	ユエーニーラー。タウンロウンゲー (ရွှေညိုလာ။သောင်းလုံးငယ်)	so.(w)

[出典] 貝葉 [UHRC pe465], 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

(55-1) については 1883 年写本 [UHRC pe465] には表題が書かれていないが、1902 年写本 [UCL pe42332 : gha(k)] と写本年不明の写本 [NL kin351 : ghay(w)] には「チャウミヤウン町のマンゴーの木の下に住んでいる時に、鳥の雄と雌がさえずっているのを詠んだ歌」と書かれている。(81-5) には直接の表題がないが、これは (81) の表題「森の場面、オウンフナー池の森で、懐かしい気持ちで詠んだモン音楽の歌」[UHRC pe465 : ngaa(w)] の中に含まれている作品である。(83-2) にも直接の表題はないが、「パッピョー」の箇所挙げた (83-1) 「池の<sup>ボエ・チン</sup>編み歌」[UHRC pe465 : ngu(w)] に続いて掲載されている。(114-1) は「ローカナッ・<sup>シン</sup>レ歌謡」[UHRC pe465 : so.(w)] と書かれている。

次に、『題名集』の「6 巻」に相当する部分と重複している作品について見ていく (表 14 参照)。

表 14 『ウー・サ』中の「四穴音付着歌」と「6巻 (パッピョー他)」の両方に分類されている作品

番号	出だし	頁
15	テーテーゲーティーター (သေးသေးငယ်ငယ်တည်သာ)	ke(w)- ke.(k)
34-37	タズインクワーピャー (သင်္ဃော့ပြာ <sup>77</sup> )	kho.(k)
170-2	テーテーゲーティ (သေးသေးငယ်တည်)	nyu (w) -nyuu (k)
173-1	タズインクワーピャー (သင်္ဃော့ပြာ <sup>78</sup> )	nyay:(k)

[出典] 貝葉 [UHRC pe465], 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

(15) は「タモウツダゴータ王子王女達が海を渡る歌」[UHRC pe465 : ke(w)], (170-2) は「歌」[UHRC pe465 : nyu(w)], (173-1) は「歌」[UHRC pe465 : nyay:(k)] と書かれている。(34-37) は、先にも挙げた (34) の表題以下に含まれており、やはり「歌」と記され、ジャンル名は記載されていない。

### (3) タライン族歌謡

「タライン」はモン族の旧称であり、歌謡ジャンル名としては、現在では「モン歌謡 (モン, モン・タン)」と呼ばれる [Ministry of Culture 1969 : 86]。『題名数』の中で「タライン族歌謡」に分類 [NL barnard1076 : ka:(w)] されている 11 篇のうち、『ウー・サ』中にも掲載されている作品は 3 篇あった (表 15 参照)。

表 15 『ウー・サ』中の「タライン族歌謡」作品

番号	出だし	頁
55-2	セインミヤンチェー (စိန်မြရံခြယ်။)	ga:(w)-gha(k)
55-5	セインチェーリンニーヤウンフヌエー (စိန်ကြယ်လင်းညိုရောင်နှယ်။)	gha(k)-gha(w)
81-1	ターヤユエーレー (တာရရွေလယ်)	ngaa(w)-ngi(k)

[出典] 貝葉 [UHRC pe465], 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

(55-2) と (55-5) は、1883 年写本には作品しか掲載されていないが、他の『ウー・サ』貝葉写本 2 点には、次のような説明文が作品の前に記されている。

(55-2, 55-5) 緬曆 1203 年〔西曆 1841 年〕, シュエポーの御威光開く六牙象の持ち主であられる大正法王陛下が、オウツカラーパ町でお暮らしになられている

77 (173-1) と同じ。

78 (34-37) と同じ。

際に、ダラ町行政地区のピャーポウンのタラインらの歌の歌詞の通りに書くようにとの御下命でお命じになられて書いた [UCL pe42332 : ghaa(k)], [NL kin351 : gho.(k)]。

「歌の歌詞の通りに」と訳した部分は逐語訳では「歌詞の通りに従って」となる。「従って (ライツ laik)」は、筆者がすでに指摘したように [井上 2008a], ある作品の旋律を用いて歌詞のみを書きかえる場合に使用する用語であり、ここでも歌詞のみを新たに作ったことを意味すると考えられる。

(81-1) は「森の場面, オウンフナー池の森で, 懐かしい気持ちで詠んだ<sup>モン・タン・タチン</sup>モン音楽の歌」 [UHRC pe465 : ngaa(w)] と書かれている。ここでは、「歌」を表す「タン」と「タチン」という言葉が重ねて使用されているため「モン音楽の歌」と訳出した。「モン・タン」と使用した場合はジャンル名として捉えることができる。「モン・タン」は、『大歌謡の世界』 [UCL pe11170] (貝葉の写本年 1893 年, 刊本の初版年 1881 年), 『著名歌謡作品全集』 [NL 3149] (1917) ではジャンル名として確立している。しかし, 上記の表題の中では, 「モン・タン・タチン」と記載されていることから, ここでは「モン音楽の歌」という意味として捉えることができる。『大歌謡の世界』では, 「タラインを詠んだモン・タン」として先の (55-5) が掲載されている [UCL pe11170 : ghaw(k)]。『著名歌謡作品全集』では, 「タライン族歌謡」としてジャンル名の見出しが記載されている [NL 3149 : Daa(k)]。その頁の後に掲載されている作品の多くには「モン語のタージン・タン〔詩の一種〕」 [NL 3149 : Di(k)-Di(w)], 「モン語の音楽<sup>79</sup>」 [NL 3149 : Du(k)] などと記載されている。『著名歌謡作品全集』の刊本では, 「モン・タン」という見出しに書き直されている [Myint Kyi ed. 1999 : 352]。『ウー・サ』においては, モン族の音楽を使用したことは示されているものの, タライン族歌謡, もしくはモン歌謡という一つのジャンルとしてはウー・サは言及していない。

#### (4) <sup>ヨーダヤー・タン</sup>アユタヤ歌謡

『題名数』で「アユタヤ歌謡」として分類 [NL barnard1076 : ka:(w)-kha(k)] されている 38 篇のうち, 『ウー・サ』中にも掲載されている作品は 17 篇あった (表 16 参照)。ビルマ語で「ヨーダヤー」はタイのアユタヤ, 及びタイを指す。歌謡ジャンル名としては, 「アユタヤ」を指すため, 「アユタヤ歌謡」とする。

79 原語は「than-zoun than」。「音が揃った音楽」という意味で, つまり音楽を指す。



表 16 『ウー・サ』中の「アユタヤ歌謡」作品

番号	出だし	頁
5-4	タウンユエーレー (သောင်ရွေလယ်။)	kii(k)-kii(w)
6	ルンポーアウン (လွမ်းပို့အောင်)	kii(w)
34-4	パンフモウンチャインレー (ပန်းပွဲချိုင့်လယ်။)	khuu(k)
34-8	ヒンダーフゲッケー (တင်းသာငှက်ကယ်။)	khuu(w)
34-35	ポークワーウエーディフニン (ဘော်ကွာဝေးသည်နှင့်။ <sup>80</sup> )	khay:(w)-kho.(k)
34-46	サウンユンヌエーチャーチャー (ဆောင်ယွန်းနေချီချီ။)	khaw(w)
34-47	セツレーピョーバーフナイン (စက်လဲပျော်ပါနွိုင်။)	khaw(w)-khan(k)
71-1	オーニャーヤンナンピョーメー (အိုညာရန်နန်းပျော်မယ်။)	ghay.(w)-gho(k)
82-10	ヨングエーナンレー (ယုန်ငွေနန်းလေ <sup>81</sup> )	ngu(k)-ngu(w)
82-12	レーピイラウンディフニン (လေပြည်လောင်းသည်နှင့်။ <sup>82</sup> )	ngu(w)
85-4	オーニャーヤンナンピョーメー (အိုညာရန်နန်းပျော်မယ်။)	ngay.(k)
117	フリヤンニーリン (လျှံညီးလင်း)	san(k)
118-1	ピヤンクンミュエーニン (ပျံ့ကွန်မြူးနင်း။)	san(k)-san(w)
126-1	ヨングエーナンレー (ယုန်ငွေနန်းလေ <sup>83</sup> )	shi(k)-shi(w)
126-3	レーピイラウンディフニン (လေပြည်လောင်းသည်နှင့်။ <sup>84</sup> )	shi(w)
144-1	カーヌエーランスイーズイー (ခါနေလန်းစီစီ။)	shaw(k)-shaw(w)
172	ポークワーウエーディフニン (ဘော်ကွာဝေးသည်နှင့်။ <sup>85</sup> )	nyuu(w)

[出典] 貝葉 [UHRC pe465], 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

(5-4) は、次の説明に続いて掲載されている3篇の次に「その歌」と記載されている。

皇太子殿下のお書きになられた、イーナウン劇の花が舞う場面で、夏の情景として、森から始まり、朝に鳥の雄雌がそろって木々で日の光を受けて、羽を広げているのを見て、乳母の二人を引用して詠んだ憂い懐かしむ歌 [UHRC pe465 : kii(k)]。

上の説明の後に掲載されている「シュエータウンパン」で始まる作品 [UHRC pe465 : kii(k)] は、『題名数』には記載されていないが、『著名歌謡作品全集』 [NL 3149 : su(k)]

80 (172) と同じ。  
 81 (126-1) と同じ。  
 82 (126-3) と同じ。  
 83 (82-10) と同じ。  
 84 (82-12) と同じ。  
 85 (34-35) と同じ。

と『大歌謡の世界』[UCL pe11170:ghu(w)]においては「パッピョー」に分類されている。また、(6)は、「御威光の非常に大きな皇太子殿下が、アユタヤの芝居で王子が出てくる、アユタヤ語〔タイ語〕の演奏の柔らかい歌を、ミヤンマー〔ママ〕の言葉と音の通りにして書かなければならないという御下命があり、書いた歌」[UHRC pe465:kii(w)]と書かれている。ここでは、「アユタヤ」という言葉はジャンル名としてではなく、地名もしくは言語として使用されている。また、この表題からは、アユタヤの言葉で歌われる歌を、ビルマ語（ミヤンマー語）の歌詞に変えただけでなく、旋律とおそらく音階にも変化を加えたことが分かる。

(118-1)の説明文は次の通りである。「アユタヤの馬に乗り演奏する歌。ミインムー村領主ミン・マハーティーリゼーヤトゥーラが83歳になったばかりの時に書いた」[UHRC pe465:san(k)]。「ミン・マハーティーリゼーヤトゥーラ」はウー・サの称号である。ここでも、「アユタヤ」という言葉はジャンル名としては使用されていない。

この作品に続いて、「その、スインシュエーウツ（象が金をまとう）の節と同様に、アユタヤの言葉で書いた」と記載されており、「チャーニョーボワーチャー」で始まる作品が掲載されている [UHRC pe465:sa:(w)]。ここで述べられている「スインシュエーウツの節」は、前の作品の途中部分である [UHRC pe465:sa:(k)]。ウー・サが、その部分の旋律を用いてアユタヤの言葉で作詞したことを意味すると考えられる。ウー・サは祖先にモン族がいたといわれ [Ba Tin n.d.:29]、モン語ができたと考えられており、またタイ語やいくつかの外国語が理解できたといわれている<sup>86</sup>。この作品は、『題名数』では「アユタヤ歌謡」に分類されていないが、形式的には前出の作品と同じであることが説明文から分かる。

(144-1)<sup>87</sup>の表題は、「アユタヤ音楽風の歌」[UHRC pe465:shaw(k)]となっている。この作品の歌詞の後には次のような説明文がある。

この歌は、緬暦 1166 年ダバウン月〔西暦 1805 年 3 月〕、ミンゲン仏塔の北、御孫のザガイン王子の善行であるシンビューパヤー仏塔の傘蓋をお乗せになる祭で、皇太子が、アユタヤ芝居の演劇者たちと王宮の演劇者シュエカンシュエヌらが御前で競演しなければならなくて、演奏し歌い踊るために、歌が必要であると要請したために、ミンゲン御庭園内で皇太子の財政担当官マウン・サ〔ウー・サ〕

86 緬暦 1151 年（西暦 1789 年）にシュエダウン皇太子が、タイ人が演じるイーナウン劇の出来事をビルマ語に翻訳する集団を作り、メンバーの 7 名にウー・サも含まれていた [Ohn Shwe 1966:83-85]。「ウー・サは、ヒンディー語、マニプール・カテー語、タイ語、モン語と中国の歌に堪能であっただけでなく、英語やローマカトリック教徒の讃美歌も歌えた」[Zwe Sape Press 1967:sa]

87 この作品は『著名歌謡作品全集』には掲載されていないが、『大歌謡の世界』（刊本）には「アユタヤ歌謡」（「イーナウン・弦歌・ヨーダヤー」と書かれている）として掲載されている [Yauk n.d.:109-110]。筆者が入手した『大歌謡の世界』の刊本では 97 頁から 104 頁までが欠落しており、また刊本の 105 頁の作品番号 179 から 113 頁の作品番号 190 までが、貝葉の方に欠けているため、ここで引用した部分は刊本でしか確認できなかった。

が歌を作って、皇太子の演劇者のシュエーバン、ンガ・シュエーチャー、ンガ・シュエーカンガレーらと<sup>ヨウダヤ</sup>アユタヤの小演劇者 30 人に渡した、<sup>ヨウダヤ</sup>アユタヤ音楽風の歌を素早くミンゲンで書いてあげた歌に〔音の〕上り下がりが一致しない箇所があるのをその通りに歌っていて、多くの人がそのまま歌い演奏してしまうので、調和するように修正した歌である [UHRC pe465 : shaw(w)]。

上記の記述からは、アユタヤの演者とビルマ王宮の演者が競演したこと、アユタヤ音楽風の歌を作って歌ったことが分かる。

(34-4), (34-8), (34-35), (34-46), (34-47) の5篇は、これまで何度か挙げた (34) の後に続く中に含まれており、「アユタヤ」という用語は現れない。(71-1) の表題は (71) の「シュエポー陛下の御下命により、タンパツ町でマハーティーリゼーヤトゥラ〔ウー・サ〕が書いた。思い悩み気落ちした歌」[UHRC pe465 : ghay.(w)] となっている。また、(85-4) は (71-1) と出だしが同じであるが、後半の歌詞は異なり別作品である。(85-4) が含まれる (85) の表題は「踊り子達が歌うための、御僧院にささげる四音朗詠詩」[UHRC pe465 : nge(w)] である。

その他、(82-10), (82-12) は、「弦歌」で分類された (82) の表題以下に掲載された中に含まれている。またこの2篇は、(126-1), (126-3) として後にも掲載されており、ここでは表題が付されていない。(117) は「ミヤガレー〔王女〕。王女の就寝」とある [UHRC pe465 : san(k)]。

(172) も「歌」とのみ記載されていた [UHRC pe465 : nyuu(w)]。この作品は、『著名歌謡作品全集』では、「タモウツダゴータ戯曲の旋律」と記載されている [NL 3149 : Thay:(k)]。『ウー・サ』の中でも、この戯曲の間に挿入する形で掲載されている。

以上見てきたことから、『題名数』で「アユタヤ歌謡」として分類されている作品は、『ウー・サ』においては、「アユタヤ歌謡」というジャンルの作品として掲載されていないことが指摘できる。先に見た「タライン族歌謡」の場合と同様、「アユタヤ」の要素を取り込んだ形で作られた経緯が示されているのみであることが分かる。

#### (5) <sup>ミンゲン・チョー</sup>馬術弦歌

『題名数』の「9巻」に相当する「馬術弦歌」に分類 [NL barnard1076 : khaa(w)-khi(k)] されているウー・サの作品は、(64-2) 「コートウエーヤダナー (ကိုးသွယ်ရတနာ)」 [UHRC pe465 : ghu(k)] で始まる作品1篇であった。この作品は、次の説明文の後に記載されている3篇の作品のうち二つ目に当たる。

(64-2) 緬曆 1207 年第 2 ワーゾー月白分 6 日〔西曆 1845 年 7 月 10 日〕に、タンパツ町の王宮で献納した四音朗詠詩、ローカナッ歌謡、燭台舞踊歌、デイン歌謡も献納したところ、お気に召されて、非常に驚嘆なされて、お楽しみになられた [UHRC pe465 : ghu(k)]。

ここには、「馬術弦歌」というジャンル名は記されていない。例が少なく早急に結論づけることはできないが、「馬術弦歌」は弦歌と同じ形式の作品が内容に基づいて別のジャンルになった例であることから、『ウー・サ』においてはジャンルとして確立していない状況で書かれたものが、『題名数』の中で細分化された可能性が考えられる。

本節で見てきたパッピョー、タライン族歌謡、アユタヤ歌謡は、作者の年代からコンバウン時代に現れたと考えられるジャンルであり、第2節で見たジャンルに対して新しい部類の歌謡である。この三つのジャンルは、ウー・サの創作の中ではジャンルとして意識されていないことが分かった。

#### 4 ウー・サの創作におけるジャンル概念

以上見てきた中で、『題名数』に記載されているジャンル分類のうち、『ウー・サ』にも記載されている作品のジャンル名を表17にまとめた。

表17 『題名数』中のジャンル名と『ウー・サ』に登場するジャンル名

『題名数』中ウー・サが手がけているジャンル	『ウー・サ』に登場するジャンル名	ウー・サの作品数
承前歌	承前歌	4
編み歌	編み歌	23
弦歌	弦歌	5
<small>ナツ・セー・チュー</small> 精霊をなだめる歌	<small>セー・ドー・チュー・ジン</small> おなだめになられる歌	2
<small>ティエウエターヤーディ・ナツ・チン</small> 歌声のよい精霊歌	<small>ナツ・ティエジン</small> 精霊の歌 マハーベインネー神歌 15名の大精霊の <small>リンガー</small> 四行古詩	3
テインガー氏歌謡	テインガー氏歌謡	3
デイン歌謡	デイン歌謡	35
季節詩	季節詩	8
四音朗詠詩	四音朗詠詩	21
37の精霊他	精霊歌	1
パッピョー	—	32
パッピョー他	—	27
<small>レードゥエタンカツ・チーボエ</small> 四穴音付着歌	—	8
タライン族歌謡	—	3
<small>ヨーダヤー・タン</small> アユタヤ歌謡	—	17
馬術弦歌	—	1

[出典] 貝葉 [UHRC pe465], 貝葉 [NL barnard1076] より筆者作成。

表17中、『ウー・サ』に登場するジャンル名は、本稿第2節で扱ったもので、承前歌、編み歌、弦歌、精霊歌、及び季節詩などの韻詩として形式の確立していたものが占める。これらは、最も古い調律種と考えられるフニンロン調律種<sup>86</sup>で演奏される古い部類の歌謡とされるものである。『ウー・サ』がまとめられた時期には、これらはジャンルとして確立し、ジャンル名がウー・サによって認識されていたことが分かる。

表17のうち『ウー・サ』に登場しないジャンル名は本稿第3節でまとめたものである。これらには、コンバウン時代に使われるようになったとされる調律方法（アウツピャン調律種、パレー調律種）を使用する、パツピョー、タライン族歌謡、アユタヤ歌謡が含まれる。本稿では大歌謡の演奏の側面については扱わなかったが、大歌謡は豎琴や竹琴、環状太鼓などの楽器と共に演奏される。パツピョー、タライン族歌謡、アユタヤ歌謡に属する作品において、これらの楽器で使用される調律種が一気に多様化する。さらに、弦歌、編み歌、承前歌に頻繁に使用される旋律も用いつつ、新しい旋律が創作に用いられるようになる。特に、パツピョーは歌唱の複雑な節回しが特徴であり、大歌謡の中でも技術的に最も難易度が高いとされる作品が多く含まれる。ウー・サがこのようなジャンルに数多くの作品を残していることから、ウー・サが新しい創作の試みを行っていたことが示唆される。そして、それらについては、ウー・サは特定のジャンルとして意識していなかったといえよう。

## おわりに

本稿では、ウー・サ自身が1849年に編集した『ウー・サ』における歌謡ジャンル概念について検討してきた。1870年の『題名数』における歌謡ジャンル名の多くは『ウー・サ』の中にも見ることができた。筆者はすでに、ウー・サが、彼が「タンザン（新奇な音）」と呼んだパツピョーとそれ以前に現れていた弦歌の形式をつなぐ位置で創作を行っていたことを指摘した〔井上 2008a〕。ウー・サは、「タンザン（新奇な音）」以前に現れていたと考えられる弦歌、編み歌、承前歌については個々のジャンルを意識して創作を行っていた。一方、彼が「タンザン（新奇な音）」と呼んだパツピョーや同時代に現れたと考えられるアユタヤ歌謡などにおいてはジャンルとしての枠組みを意識せずに、新しい創作の試みとして歌謡を作っていた様子がうかがえる。

特に、大歌謡の中心的ジャンルであり中でもウー・サが代表的な作り手とされるパツピョーについては、パツピョーという言葉自体が『ウー・サ』の中には登場せず、多くの場合「歌」と表現されていた。そして、「タンザン（新奇な音）」と表現している場合が見られたことから、このタイプの歌謡を当時における新しいタイプの歌謡としてウー・サが認識していることが分かる。現在では、「タンザン（新奇な音）」という言葉は「流行歌謡」という意味で用いられることもある。当時における意味については検討の余地があるが、おそらくその当時の「現代歌謡」的なものであったと考えることができる。

86 調律種については、註4及び〔井上 2008b〕を参照。

井上：ビルマ古典歌謡におけるジャンル概念—ウー・サ歌謡集の19-20世紀における貝葉写本の分析を通して—

パッピョーというジャンルは、後にこのジャンルにまとめられることになったウー・サによる新しいタイプの作品が彼によって大量に作られ、1849年に『ウー・サ』の中にまとめられて後、1870年の『題名数』に至る約20年の間にジャンルとしてその範囲が明確にされていったとも考えられる。

〔謝辞〕本研究は、平成16～18年度日本学術振興会科学研究費補助金（特別研究員奨励費）及び、平成19～21年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究B）の助成を受けたものである。

## 参考文献

### 1. 未公刊資料

- 略称：NL：National Library, UCL：Universities Central Library, UHRC：Universities Historical Research Centre, UKMT：U Khin Maung Tin氏所蔵
- NL 3149, *Thabba gitekkama pakathani gyan* (著名歌謡作品全集).
- NL barnard1076, *Thachin ghaunzin pouk ye hmatsu daw* (歌謡題名数の御記録) (本文中『題名数』).
- NL kin351, *Myawadi Mingyi, min ahsehset yeitha hsethwin dhi sa zu* (ミヤワディ卿が歴代の王に書き贈った文集) (本文中『ウー・サ』[NL kin351]).
- UCL pe11170, *Maha gita meidani gyan* (大歌謡の世界).
- UCL pe42332, *Myawadi Mingyi thachin luta yadu zat zaga zu* (ミヤワディ卿の歌謡, 四音朗詠詩, 季節詩, 戯曲の台詞集) (本文中『ウー・サ』[UCL pe42332]).
- UHRC pe465, (no title) (本文中『ウー・サ』[UHRC pe465]).
- UKMT pe1, (no title) (弦歌).
- UKMT pe2, *Pathama, thachingan-gyi, thachingan-lat, thachingan-nge, nat-thachingan, hmat-su-daw* (1巻, 大承前歌, 中承前歌, 小承前歌, 精霊承前歌の記録).

### 2. 公刊資料

- Ministry of Culture, 1969(1954) (2nd ed.), *Nainggandaw mu maha gita* (国家版大歌謡), Yangon, Ministry of Culture.
- Myint Kyi ed., 1999, *Thabba gitekkama pakathani gyan* (著名歌謡作品全集), Yangon, Ministry of Culture.
- Yauk, Sheinei U. n.d. *Maha gita meidani gyan* (大歌謡の世界). Yangon, Union of Myanmar press, workers press.
- Zwe Sape Press, 1967, *Maha thiri zeiya thura Myawadi mingyi U Sa i Myawadi sa zu hnin thachin zu* (マハーティリーゼーヤトゥラ・ミヤワディ卿ウー・サのミヤワディ文集と歌謡集), Yangon, Zwe Sape Press.

### 3. 引用文献

#### ビルマ語文献

- Ba Tin, Shwepyin U, n.d., *Myawadi sapei gita* (ミヤワディの文学音楽), Yangon, Pyi-chit Sapei taik.
- Hla Shwe, Sagaing, 1994, *Maha gita* (大歌謡), Yangon, Sapei Beiman.
- Khin Maung Nyunt, n.d., *Myanma gita wohara abhidhan* (ミャンマー音楽用語事典), n.p.
- Ministry of Culture, 2001, *Myanma anuthukuma abhidhan (Dictionary of Myanma Performing and Plastic Arts)*, Yangon, Myitta Press.
- Myint Kyi, U, 2001, *Myanma te gita anu sape thamain* (ミャンマー歌謡芸術文学の歴史), Yangon, Ministry of Education.
- Ohn Shwe, U. ed. 1966. *Natshinnaung yadu paun chouk* (ナッシンナウンの季節詩集), Yangon, Hanthawadi Press.



### 英語文献

- Becker, Judith, 1968, "Modes and the Oral Tradition in Burmese Music", Master of Arts, University of Michigan.
- 1969, "The Anatomy of Mode", *Ethnomusicology*, Vol. 13, No. 2, (5, 1969), pp. 267–279.
- Garfias, Robert, 1975, "Preliminary Thoughts on Burmese Modes", *Asian Music* VII (1), pp.39–49.
- Garfias, Robert / Becker, Judith / Williamson, Muriel C., 1980, "Burma". in *The New Grove Dictionary of Music and Musicians*, vol.3, Stanley Sadie ed., London, Macmillian Publishers Ltd.
- Khin Zaw, 1940, "Burmese Music : A Preliminary Enquiry", *The Journal of the Burma Research Society* vo.xxx, 1940, pp. 387–466.
- Williamson, Muriel C., 2000, *The Burmese Harp, its Classical Music, Tunings, and Modes*, Northern Illinois University Monograph Series on Southeast Asia Number 1, DeKalb Illinois, Center for Southeast Asian Studies, Northern Illinois University.

### 日本語文献

- 井上さゆり, 2007, 「ビルマ古典歌謡におけるジャンル区分の形成：貝葉写本における歌謡集の分析を中心として」, 『アジア・アフリカ言語文化研究』74号, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 東京, pp. 121–163.
- 2008a, 「ビルマ古典歌謡における創作技法とジャンルの分化: チョー(弦歌)からパッピョー(鼓歌)へ」, 『東南アジア—歴史と文化—』37号, 山川出版社, 東京, pp. 28–59.
- 2008b, 「ビルマ古典歌謡における作品とジャンルの関係—演奏様式の解釈としてのジャンル—」, 『東洋音楽研究』第73号, 東洋音楽学会, 東京, pp. 1–19.
- 山口修, 徳丸吉彦, 1992, 『地球の音楽 52 ミャンマー ヤンゴンとマンダレーの古典音楽 器の音, そして声』, 日本ビクター株式会社, 東京.

(2009. 12. 21 受理)

